

平安京右京六条一坊三町・
七条一坊一町跡、御土居跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇二二―一五

平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条一坊三町・
七条一坊一町跡、御土居跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、施設整備に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

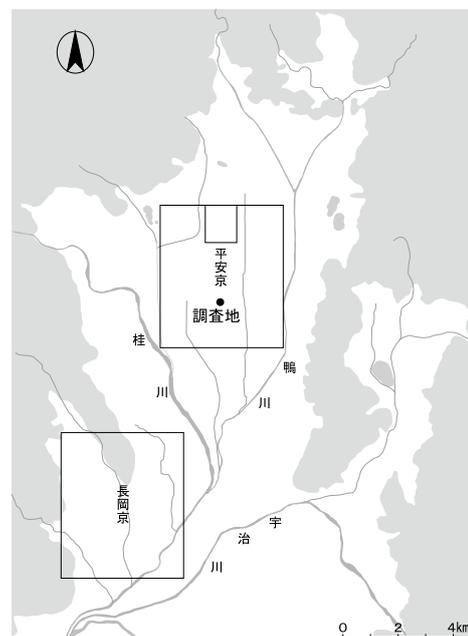
令和4年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 遺 跡 名 | 平安京跡・御土居跡（京都市番号 18H722、19H620） |
| 2 | 調査所在地 | 京都市下京区中堂寺南町130番地1の一部（関連1号棟跡地）
朱雀分木町85番地及び86番地、中堂寺南町1番地1及び6番地14の一部
（北通路南東側部分） |
| 3 | 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 | 調査期間 | 2022年1月18日～2022年3月31日 |
| 5 | 調査面積 | 422.25㎡ |
| 6 | 調査担当者 | 松吉祐希・布川豊治 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 | 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 | 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 | 本書作成 | 松吉祐希
付章1：丸山真史（東海大学）
付章2：株式会社パレオ・ラボ |
| 14 | 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の契機	1
(2) 調査の方法と経過	2
2. 調査地の位置と環境	3
3. 遺 構	7
(1) 1区の遺構	7
(2) 2区の遺構	7
4. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
(2) 土器	9
(3) 瓦	11
(4) 木製品	11
(5) 骨・貝・種実	13
5. ま と め	14
(1) 調査地の歴史の変遷	14
(2) 御土居について	14
付章1 堀13(御土居跡)から出土した動物遺存体	21
付章2 自然科学分析	24

図 版 目 次

図版1	遺構	1区平面図・北壁断面図(1:80)
図版2	遺構	2区平面図(1:150)
図版3	遺構	2区西壁断面図(1:80)
図版4	遺構	2区北壁・セクション断面図(1:80)
図版5	遺構	1 1区全景(東から) 2 2区北半全景(北西から)
図版6	遺構	1 2区北半犬走18・土塁19検出状況(南西から) 2 2区南半全景1(北から)

- 図版7 遺構 1 2区南半全景2（南東から）
 2 2区南半完掘状況（北西から）
 3 2区南半畝状高まり断面（北東から）

図版8 遺物 堀13出土土器・木製品

挿 図 目 次

図1	調査区配置図（1：2,000）	1
図2	1区調査前全景（南東から）	2
図3	1区作業状況（東から）	2
図4	2区調査前全景（南から）	2
図5	2区北半作業状況（南から）	2
図6	周辺調査位置図（1：5,000）	3
図7	1区セクション断面図（1：50）	7
図8	土器実測図（1：4）	10
図9	瓦拓影及び実測図（1：4）	11
図10	堀13出土木製品実測図（1：4）	12
図11	調査地周辺における御土居堀の畝状高まり（1：400）	15
図12	御土居主要調査地点位置図（1：40,000）	16

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	9
表4	御土居主要調査一覧表	17

(北通路南東側部分)に位置し、平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡にあたる。

調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下、「文化財保護課」とする)の指導のもと、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が行った。

今回の調査では、試掘調査や既往の周辺調査の成果から、1面の遺構面を想定し、平安時代の遺構と御土居の堀の検出、それに伴う遺物の確認を目的とした。

(2) 調査の方法と経過 (図1)

調査区は文化財保護課の指導により、2箇所に分けて行った。1区が平安京右京七条一坊一町跡、2区が同六条一坊三町跡・御土居跡にあたる。調査面積は1区31.25㎡、2区391㎡で、総面積は422.25㎡である。2区は排土置き場の関係から北半と南半に分けて調査を行った。

調査は1区から開始し、2区北半、2区南半の順に行った。現代造成土は重機を用いて掘削し、遺構の検出及び掘削は人力で行った。1区では土坑を、2区では御土居の堀・犬走り・土塁の基底部などを検出した。検出した遺構は平面図及び土層断面図などを作成し、写真撮影などの記録作業を行った。調査後は重機により埋め戻しを行い、1・2区ともにアスファルトを敷設して原状に戻した。調査期間は令和4年1月18日から3月31日である。

調査中は適宜、文化財保護課の指導及び、検証委員の龍谷大学の國下多美樹教授、京都大学の伊藤淳史助教の視察を受けた。



図2 1区調査前全景(南東から)



図3 1区作業状況(東から)



図4 2区調査前全景(南から)



図5 2区北半作業状況(南から)

2. 調査地の位置と環境

調査地は、1区が平安京右京七条一坊一町の北東隅、北側の2区が右京六条一坊三町の中央にあたる。いずれも東側が朱雀大路に面した坊城の地で、右京六条一坊三町は北を六条坊門小路、西を西坊城小路、南を楊梅小路に、右京七条一坊一町は北を六条大路、西を西坊城小路、南を左女牛小路に画される。

調査地周辺では、これまでに中央市場や西側に広がるリサーチパークの開発、北に通る五条通の拡幅に伴い、多くの調査が行われてきた。(図6、表1)

平安時代前期の遺構としては、2区と同じ右京六条一坊三町や、西隣の六町でも掘立柱建物や井戸が検出されている(XF8・13、SM10・14)。2区の南西に位置する右京六条一坊五町では、1町の4分の3ほどが調査されている(XF2)。この調査では、大規模な掘立柱建物群や井戸を検出しており、1町規模の邸宅の存在が明らかとなっている。また、右京六条一坊十一～十四町では、掘立柱建物や門、柵、井戸を検出しており、4分の1町から半町ほどの中規模邸宅があったと考えられる。このように、調査地周辺は平安時代前期には大・中規模の比較的大きな邸宅が存在していたが、平安時代中期になるとほとんど遺構が確認されず、周辺は衰退したようである。

平安時代後期になると、楊梅小路や西坊城小路の側溝が掘削される(XF7・8・10・13・14・

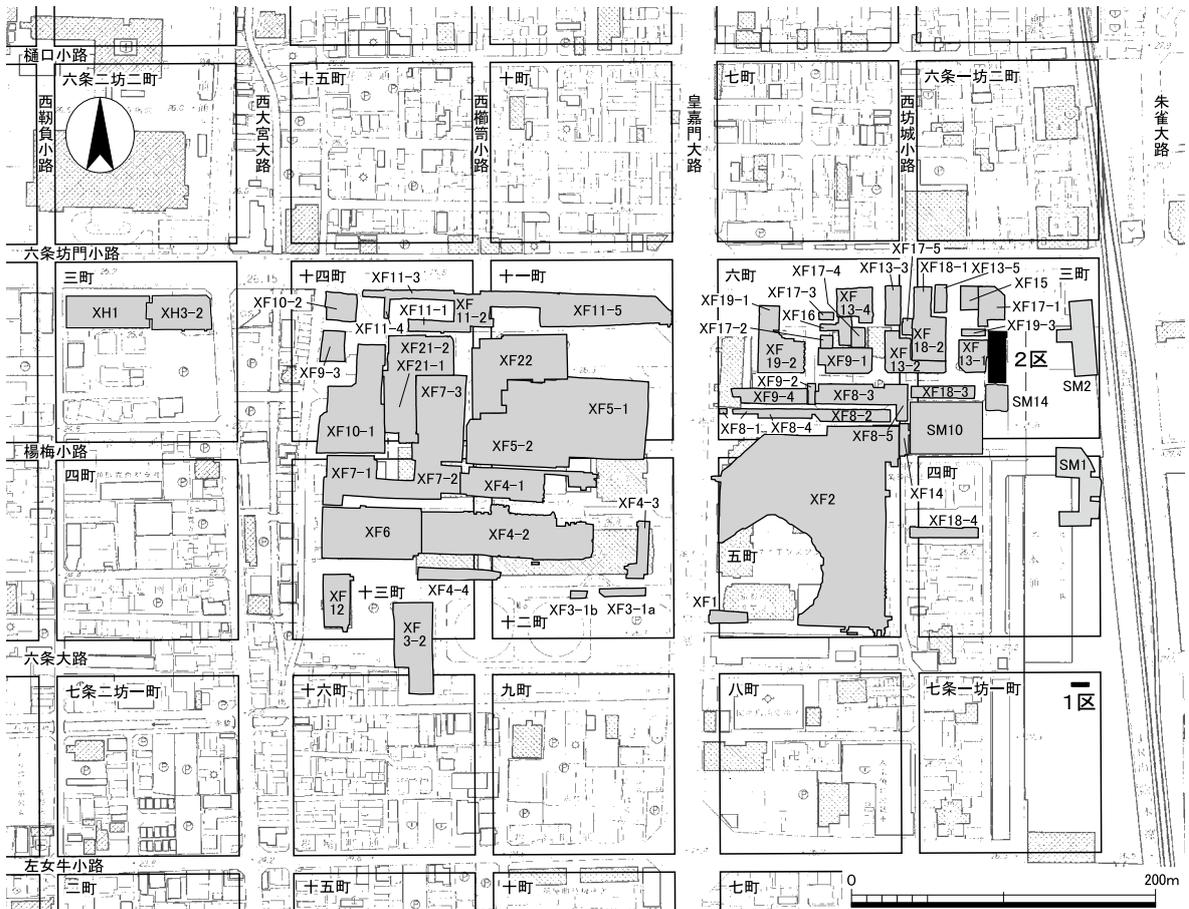


図6 周辺調査位置図(1:5,000)

表1 周辺調査一覧表

調査記号	条坊町名	所在地	調査期間	調査面積 (㎡)	主な成果	文献 番号
SM 1・2	六条一坊三町・ 四町	中堂寺南町	1979.03.10 ～06.11	2,000	[平安時代後期] 溝 [室町時代] 井戸	1
XF1	六条一坊五町	中堂寺南町17他	1987.08.03 ～08.04	55	[平安時代末～鎌倉時代前期] 皇嘉門大路東側溝	2
XF2	六条一坊五町	中堂寺南町	1987.09.16 ～1988.04.21	9,646	[平安時代前期] 掘立柱建物、井戸、皇嘉門大路東側溝 [平安時代後期～鎌倉時代] 掘立柱建物、井戸、門	3
XF3	六条一坊十二町 ・十三町、七条 一坊十六町	中堂寺栗田町1	1987.03.28 ～1989.06.07	1,610	[縄文～古墳時代] 湿地 [平安時代] 六条大路北側溝	4
XF4	六条一坊十二町 ・十三町	中堂寺栗田町1	1989.07.20 ～1990.05.30	5,670	[平安時代] 掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路東側溝 [平安時代末～鎌倉時代] 西櫛笥小路西側溝	5
XF5	六条一坊十一町	中堂寺栗田町	1991.02.12 ～6.19	6,050	[平安時代] 掘立柱建物、井戸、西櫛笥小路西側溝	6
XF6	六条一坊十三町	中堂寺栗田町1	1991.11.18 ～1992.03.07	2,000	[縄文～弥生時代] 流路 [平安時代] 掘立柱建物、井戸、溝	7
XF7	六条一坊十三町 ・十四町	中堂寺栗田町1	1992.07.13 ～1993.01.14	3,805	[縄文～弥生時代、古墳時代] 流路 [平安時代] 楊梅小路路面、南北両側溝、掘立柱建物	8
XF8	六条一坊六町	中堂寺南町	1993.08.07 ～1994.03.24	1,400	[縄文～古墳時代] 湿地 [平安時代前期] 掘立柱建物、井戸 [平安時代後期～鎌倉時代] 掘立柱建物、井戸、池跡、 西坊城小路西側溝	9
XF9	六条一坊六町・ 十四町	中堂寺南町地内	1994.04.18 ～08.31	1,247	[縄文～古墳時代] 湿地 [平安時代後期～鎌倉時代] 井戸、池跡、溝	9
XF10	六条一坊十四町	中堂寺栗田町地内	1994.08.29 ～1995.02.24	2,770	[古墳～平安時代後期] 川跡 [平安時代前期] 井戸、掘立柱建物、楊梅小路北側溝	9
XF11	六条一坊十一町 ・十四町	中堂寺栗田町地内	1995.04.10 ～12.01	3,320	[縄文～古墳時代] 川跡 [平安時代前期] 掘立柱建物、井戸	9
XF12	六条一坊十三町	中堂寺栗田町地内	1996.09.02 ～12.28	650	[平安時代前期] 池、掘立柱建物	10
XF13	六条一坊三町・ 六町	中堂寺南町地内	1997.07.13 ～12.19	1,894	[平安時代前期] 掘立柱建物 [鎌倉時代] 池、井戸、西坊城小路側溝 [江戸時代] 御土居堀	9
XF14	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1998.10.26 ～12.04	120	[平安時代後期] 井戸、西坊城小路西側溝 [鎌倉時代] 西坊城小路西側溝	9
XF15	六条一坊三町	中堂寺南町地内	1999.01.29 ～03.10	210	[平安時代後期] 井戸	9
XF16	六条一坊六町	中堂寺南町地内	1999.09.26 ～10.26	230	土取り跡	9
XF17	六条一坊三町・ 六町	中堂寺南町地内	2000.01.18 ～04.06	627	[平安時代末～鎌倉時代] 西坊城小路西側溝 [江戸時代] 御土居堀	9
XF18	六条一坊三町・ 四町	中堂寺南町地内	2000.04.09 ～10.05	1,385	[平安時代末～鎌倉時代] 西坊城小路東側溝	9
XF19	六条一坊六町	中堂寺南町地内	2001.12.03 ～2002.05.23	1,058	[平安時代以前] 川 [鎌倉時代] 建物（御堂）、池跡 [江戸時代] 御土居堀	9
XH1	六条二坊三町	西七条東御前田町 地内	2006.11.28 ～2007.03.16	1,160	[古墳時代] 流路 [平安時代] 池、埋納土坑、柵、溝など	11
XH3-2	六条二坊三町	西七条東御前田町 地内	2007.08.21 ～12.21	840	[弥生時代] 流路 [平安時代前期] 掘立柱建物、溝、埋納土坑など	12
SM10	六条一坊三町	中堂寺南町地内	2008.05.08 ～09.18	1,670	[平安時代前～中期] 掘立柱建物 [平安時代後期～鎌倉時代] 西坊城小路東側溝、楊梅小 路北側溝、門、井戸 [室町時代] 溝 [江戸時代] 土取土坑	13
XF21	六条一坊十四町	中堂寺栗田町地内	2008.10.03 ～2009.03.19	1,950	[弥生時代] 溝 [平安時代前期] 建物、門、柵、溝 [平安時代後期] 落ち込み、溝	14
XF22	六条一坊十一町	中堂寺栗田町地内	2018.07.17 ～11.05	2,390	[平安時代] 溝 [平安時代末～鎌倉時代] 溝	15
SM14	六条一坊三町	中堂寺南町 130番地1の一部	2021.01.18 ～03.04	240	[平安時代] 井戸 [江戸時代] 御土居堀	16
SM15	六条一坊三町	中堂寺南町 130番地1の一部	2022.01.18 ～03.31	422.25	今回の調査	本 報告

※ 調査記号 SMは京都市中央卸売市場関連、XFは大阪ガス京都工場跡地・リサーチパーク関連、XHは五条通拡幅工事関連の調査。

17・18、SM10)。また、右京六条一坊三町では井戸や楊梅小路に開く門(XF15、SM10)を、六条一坊五町では多数の井戸(XF2)を、六条一坊六町では掘立柱建物や井戸、地業や御堂、楊梅小路に開く門、池、(XF2・8・9・19)を検出しており、平安時代後期から鎌倉時代にかけて、調査地周辺は再び開発が行われたとみられる。一方で、平安時代前期には建物が数多く確認されていた右京六条一坊十一～十四町では、顕著な遺構は検出されていない。

室町時代以降は、耕作に伴う溝(SM10)や、井戸(SM1・2)などを検出している。

安土桃山時代には、天正19年(1591)に、豊臣秀吉により御土居が右京六条一坊二・三・四町、七条一坊一町を縦断する形で築かれる。御土居の堀はXF13・17、SM14で確認されている。御土居の堀埋没後は、近世から現代に至るまで蔬菜を生産する耕作地となった¹⁾。また、調査地西側には明治40年(1907)に京都競馬場、明治42年(1909)に大阪瓦斯京都工場が建設される。昭和2年(1927)には京都中央卸売市場が建設され、調査地はその一部となり、現在に至る。

註

- 1) 「大内村」『史料 京都の歴史』第12巻 下京区 平凡社 1981年

文献一覧(表1 周辺調査一覧表)

- 1 網 伸也「平安京右京六条一坊三・四町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2 小森俊寛「平安京右京六条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 3 梅川光隆・杉山信三ほか『平安京右京六条一坊 -平安時代前期邸宅跡の調査-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 4 長宗繁一「平安京右京六・七条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 長宗繁一「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 6 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 9 平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 10 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年

- 11 小檜山一良・卜田健司『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006 - 25
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 12 小檜山一良ほか『平安京右京六条二坊三・六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007 - 14
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 13 布川豊治ほか『平安京右京六条一坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008 - 7 財団法人
京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 14 南 孝雄『平安京右京六条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008 - 22 財団法人
京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 15 松永修平『平安京右京六条一坊十一・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018 - 9 公益
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 16 柏田有香『平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020 - 8 公益
財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年

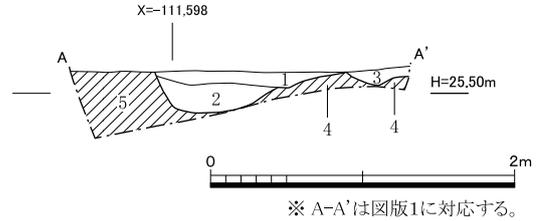
3. 遺 構

(1) 1区の遺構（図7、図版1）

調査区は東西12.5m、南北2.5mで、面積は31.25㎡である。

基本層序は上から、現在の造成土（厚さ0.6m）、近世の耕作土（厚さ0.1m）、中世の耕作土（厚さ0.1m）、平安時代の整地層（厚さ0.1～0.2m）、基盤層となる。平安時代の整地層は主に調査区北半で確認した。

平安時代の整地層の上面で、中世の溝と平安時代の土坑を検出した。



- ※ A-A'は図版1に対応する。
- | | | |
|---|--------------------------------------|----------|
| 1 | 10YR4/1褐灰色 混10YR6/8明黄褐色粘質シルト | 土坑2 |
| | 土器片・炭・マンガン混 | |
| 2 | 10YR4/2灰黄褐色 混10YR5/8黄褐色粘質シルト | 平安時代の整地層 |
| 3 | 10YR4/1褐灰色粘質土 φ1～10cmの礫多量混 | 基盤層 |
| 4 | 10YR4/2灰黄褐色粘質土 φ2～10cm礫多量混 | |
| 5 | 10YR3/2黒褐色粘質シルト
混10YR6/8明黄褐色粘質シルト | |

図7 1区セクション断面図（1：50）

溝1 調査区東側で調査区を縦断する南北方向の素掘溝を検出した。溝の幅は0.15～0.3mで、南北2.2m分を確認した。検出面からの深さは0.05mである。中世の耕作土の上面から成立するが、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

土坑2 調査区中央で土坑を検出した。東西2.6m、南北1.3mの東西に長い不整形を呈する。深さは約0.3mである。平安時代前期の土器が出土した。

(2) 2区の遺構（図版2～4）

調査区は東西11.5m、南北34mで、面積は391㎡である。

基本層序は上から、現代の造成土（厚さ0.9～1.5m）、近代の耕作土（厚さ0.1～0.3m）、近世の耕作土（厚さ0.2～0.4m）、基盤層となる。

基盤層上面で、堀、犬走り、土塁、近代の溝を検出した。

堀13 調査区の西側で、調査区を南北に縦断する堀の東肩を検出した。堀の西肩は調査区外となる。検出位置から、御土居の堀とみられる。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	土坑2	1区
鎌倉時代～室町時代	溝1	1区
安土桃山時代～江戸時代	堀13、犬走18、土塁19	2区
近 代	溝20	2区

堀の検出幅は、調査区北端が東西8m、調査区南端が8.5mで、南北約33m分を検出した。北でやや西に振れる。堀底には凸凹があり、深さは最深部で1.6mほどである。また、堀の肩部から底面にかけて、南北及び東西方向に基盤層を掘り残して形成された畝状の高まりを確認した。

畝状高まりは、断面は台形を呈しており、基底幅1.5～2.2m、上面幅0.3～1.0mで、堀底からの高さは0.4～0.8mである。東西方向に6条、南北方向は北半でのみ2条確認した。東西方向の畝状高まりは、4～7mの間隔をあけて設けられていた。調査区の最も北で検出した畝状高まりの上面は、灰黄褐色シルトに径3～10cmの礫を貼り付けており、固く締まっていた。

堀は、主に礫層からなる基盤層を掘って形成されている。堀の埋土は、大きく3層（上層、中層、下層）に分けられる。下層では、畝状高まりの上面や裾部に、粘土ブロックを含んだ砂～粘土（図版3 西壁22～29層）を確認した。これらは掘削直後の初期堆積とみられる。また、畝状高まりの間の凹みには、初期堆積層の上にうすく粘土層や砂層（図版3 西壁19～21層）が堆積する。中層では、畝状高まりの裾部に礫を含んだ砂や粘土（図版3 西壁10～18層）と、畝状高まりの間の凹みにはオリーブ黒色粘土（図版3 西壁9層）が堆積する。上層では、畝状高まりの裾部の堆積土（図版3 西壁7・8層）と、その上に畝状高まり頂部が埋まるほどの厚い黒褐色粘土（図版3 西壁5・6層）が堆積する。自然科学分析によると、5・6層と9層の間に堀内の水域環境に変化が生じた結果、水位が上昇した可能性がある（付章2参照）。このことから水面の標高は徐々に上がっていったとみられる。

堀からは多量の木製品が出土した。また、調査区南側で確認した堀の肩部から裾部の堆積土（図版4 B-B' 16～18層）から平安時代前期の遺物が多量に出土した（図版2 土器集中部）。

また土層断面の観察から、堀が埋没した後に、堀の東肩付近に南北方向の溝を掘り直していたことを確認した（図版4 北壁17層、B-B' 4層）。溝の幅は0.9～1.1mで、深さは0.3～0.4mである。

犬走18 調査区の北東隅と南東隅で、堀の東側に築かれた平坦面を検出した。北東隅では、東西幅が1.3mで、南北約4m分を検出した。南東隅では、平坦面の東端が調査区外となるため、検出幅が1.0mで、南北約9m分を確認した。また北東隅では、この平坦面の東側に土塁の基底部を確認した。これまでの調査成果から、この平坦面は御土居の犬走りとみられる。犬走りは基盤層を削って、上面を平坦に整形している。その直上には近世の耕作土が堆積しており、今回の調査区では基盤層の上に整地を施した痕跡は確認していない。

土塁19 調査区の北東隅で、土塁の基底部を検出した。土塁の西端は近代の溝20によりやや削平を受けているが、今回の調査では、東西1.2m分、南北3.8m分を検出した。土塁は、基盤層を掘り残して形成されており、残存高は0.8mである。

溝20 土塁19の西側で南北方向の溝の底面を検出した。この溝は、土塁19の西裾部を削って造られており、溝の上部は現代の削平を受けている。溝の幅は1.1m、深さは0.3m以上で、溝の東西両端に丸杭を打って護岸としていた。近代の耕作に伴う溝とみられる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査では、遺物整理用コンテナ20箱分（1区1箱、2区19箱）の遺物が出土した。内訳は、土器・瓦類10箱、木製品9箱、骨・貝・種実など1箱である。

遺物の大半が、堀13から出土した。堀13では土器、瓦、骨、貝、種実などが出土するが、特に木製品の出土量が多い。また土器・瓦類は、江戸時代のもものが少なく、平安時代前期のものが多い。

(2) 土器 (図8)

土坑2出土土器(1・2) 1は土師器皿。口径15.9cm、器高1.9cm。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。2は須恵器杯。器高3.2cm。内外面ともにロクロナデを施す。

堀13出土土器(3~12) 3~11は2区南半の土器集中部で出土した平安時代前期の遺物である。これらは限られた範囲で出土しており、ほぼ同一時期である。平安時代前期の調査地周辺の様相を示す遺物と考えられるため、図化した。

3・4は土師器高杯。3は杯部のみ残存する。口径32.8cmで、残存高4.4cm。摩滅が著しいが、外面にヘラミガキがわずかに残る。にぶい橙色を呈する。4は底径15.0cm、残存高19.9cm。脚部はケズリにより8角形に面取りされる。灰白色を呈する。

5は須恵器壺。口径3.9cm、底径3.9cm、器高10.9cmで、完形である。外面と口縁部内面はロクロナデ調整を行う。底部は糸切り未調整である。6は須恵器壺。体部から底部が残存しており、底径10.6cm、残存高11.4cmである。内外面ともにロクロナデ調整を行う。底部は糸切り未調整である。

7~11は灰釉陶器。7~10は皿。7は口径14.8cm、器高1.9cm、底径7.2cm。内面と口縁部外面にハケ塗施釉。8は口径15.0cm、器高2.3cm、底径7.4cm。内面と口縁部外面に灰釉を施す。内面底

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代 ～奈良時代	軒丸瓦		軒丸瓦1点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類		土師器3点、須恵器3点、灰釉陶器5点		
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、木製品、骨、貝、種実		施釉陶器1点、染付1点、木製品23点、骨10点、貝5点		
合 計		26箱	52点(5箱)	1箱	20箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

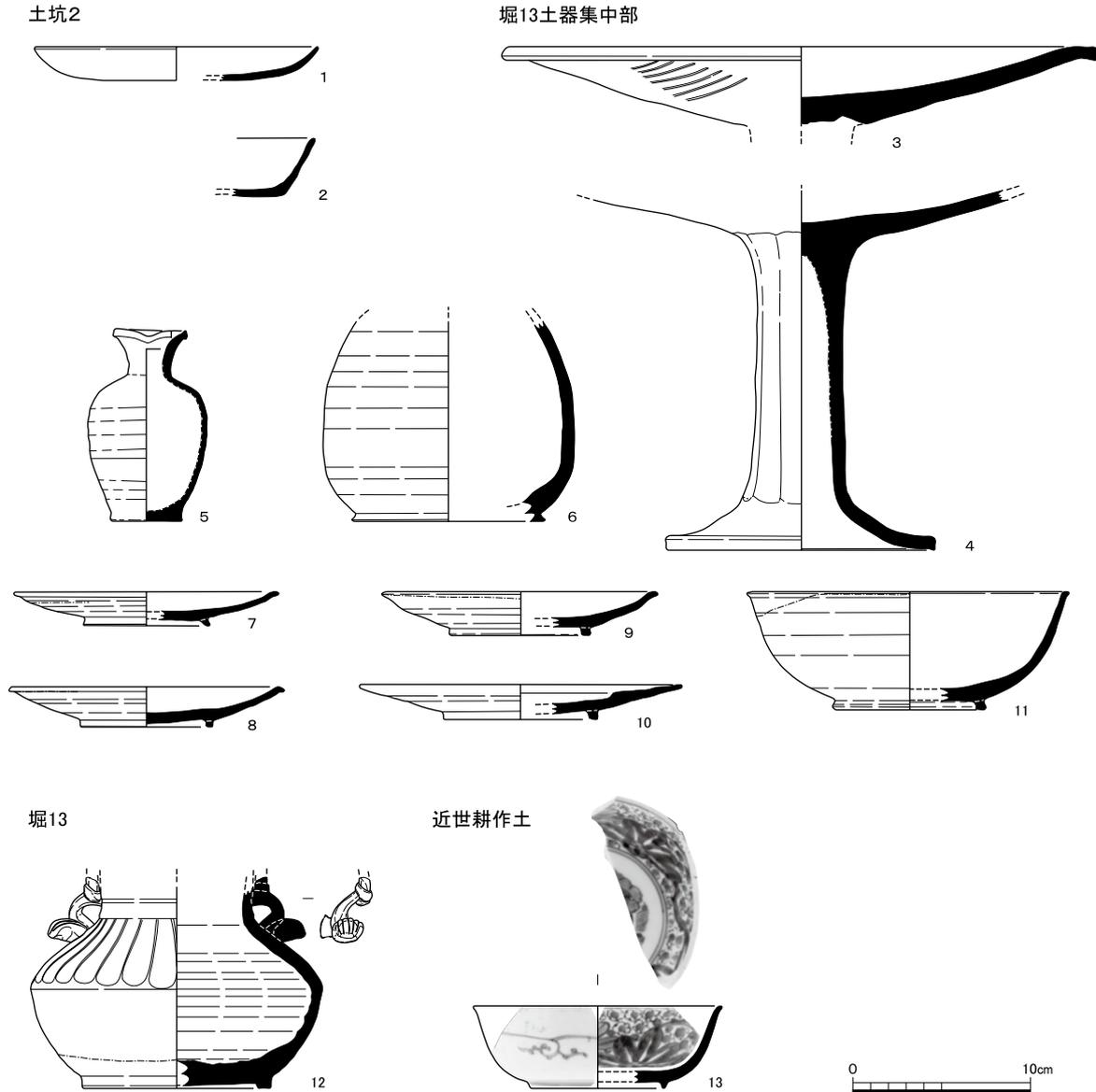


図8 土器実測図（1：4）

部には3箇所にとチン痕跡が認められる。9は口径15.1cm、器高2.5cm、底径7.8cm。内面と口縁部外面にハケ塗施釉。10は段皿で、口径18.0cm、底径8.6cm、器高2.0cm。高台外面と体部内外面に灰釉を施す。外面はハケ塗施釉。内面底部にとチン痕跡が認められる。11は椀。口径17.5cm、底径8.3cm、器高6.7cm。内面と口縁部外面にハケ塗施釉。

12は施釉陶器壺。堀13中層から出土した。底径10.4cm、残存器高11.5cm。内面と外面体部に灰釉を施すが、釉が溶け切らずに白濁しており、色調は灰白色を呈する。肩と頸のくびれ部には、装飾のついた細い紐状の耳がつく。肩部は幅1.0~1.2cmのケズリを均等に施し、鑄文様がつけられる。高台は削り出し。瀬戸・美濃産。17世紀中頃から後半とみられる。

近世耕作土出土土器（13） 染付椀で、口径13.9cm、器高4.7cm、底径7.4cm。内面に草花文、外面に草文を描く。文様は、細い線で輪郭を描き、ダミを入れる。17世紀中期以降とみられる。

(3) 瓦 (図9)

瓦1は蓮華文軒丸瓦。飛鳥時代から奈良時代とみられる。堀13の東肩から3～11の土器群と共に出土した。

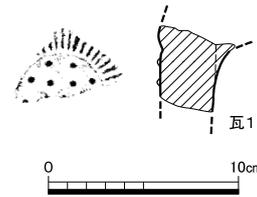


図9 瓦拓影及び実測図(1:4)

(4) 木製品 (図10)

木製品はすべて堀13から出土した。

木1～4は漆器。漆器は、小片を含めると全部で12点分出土した。椀9点、蓋1点、不明2点である。残存状態の良好な遺物を図化した。木1は蓋。口径10.7cm、器高2.5cm。赤漆塗で、おおよそ半分が残存するが文様はない。樹種はニレ科。木2～4は椀。木2は口径11.6cm、残存器高5.6cm。高台を欠損するのみで体部はほぼ完形である。外面は黒漆塗、内面は赤漆塗。外面には丸に五方木瓜文を等間隔に3つ配す。内部の唐花文は赤で、木瓜は金で手描きする。樹種はトチノキ。木3は口径12.0cm、底径6.1cm、器高7.5cm。外面は黒漆塗、内面は赤漆塗。外面には手書きによる赤の細かい線を確認できるが、漆が剥離しており全体の文様は不明である。樹種はトチノキ。木4は口径13.2cm、底径6.8cm、残存器高4.4cm。内外面ともに赤漆塗。外面には、内部に花文が配された亀甲文が並んで描かれる。文様は黒で手描きである。樹種はカエデ属。

木5は容器。底径4.0cm、残存器高5.1cm。樹種はサクラ属。

木6～9は箸。箸は、小片を含めると全部で163点出土した。完存するものは2点で、残存状態の良好な遺物を図化した。木6は完形で、長さ24.4cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm。木7は完形で、長さ23.3cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。木8は残存長22.8cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm。木9は残存長15.6cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm。木6～9の樹種はスギ。

木10～12は曲物の蓋もしくは底板。木10は、直径6.3cm、厚さ0.3cm。樹種はヒノキ科。木11は、直径7.1cm、厚さ0.7cmで、上半部を欠損する。表面に焼印が押される。樹種はヒノキ。木12は、左右に樹皮で側板を綴じた痕跡が残る。直径11.0cm、厚さ0.5cm。樹種はヒノキ科。

木13～16は栓。いずれも下端部を削って細くする。木13は長さ6.5cm、幅2.6cm、厚さ2.7cm。樹種はスギ。木14は長さ6.5cm、幅2.9cm、厚さ2.5cm。樹種はコウヤマキ。木15は長さ6.9cm、幅2.1cm、厚さ1.8cm。樹種はスギ。木16は長さ7.8cm、幅2.9cm、厚さ2.8cm。上部に直径0.5cmほどの穴が穿たれる。樹種はスギ。

木17は下駄。下駄は、全部で3点出土した。残存状態の良好な遺物を図化した。木17は長さ21.3cm、幅8.4cmで、台と歯を一木で作る連歯下駄である。台の形は長円形で、歯は二枚ですり減っている。樹種はコシアブラ。

木18は付札。長さ22.3cm、幅3.3cm、厚さ0.8cm。上端部の左右に切り欠きがある。文字は両面とも確認できなかった。樹種はスギ。

木19～21は将棋の駒。木19・20には「歩兵」、木21には「金将」と墨書される。木19は長さ2.5cm、幅は上端0.9～下端1.7cm、厚さは上端0.3～下端0.8cm。樹種はヒノキ属。木20は長さ2.5cm、幅

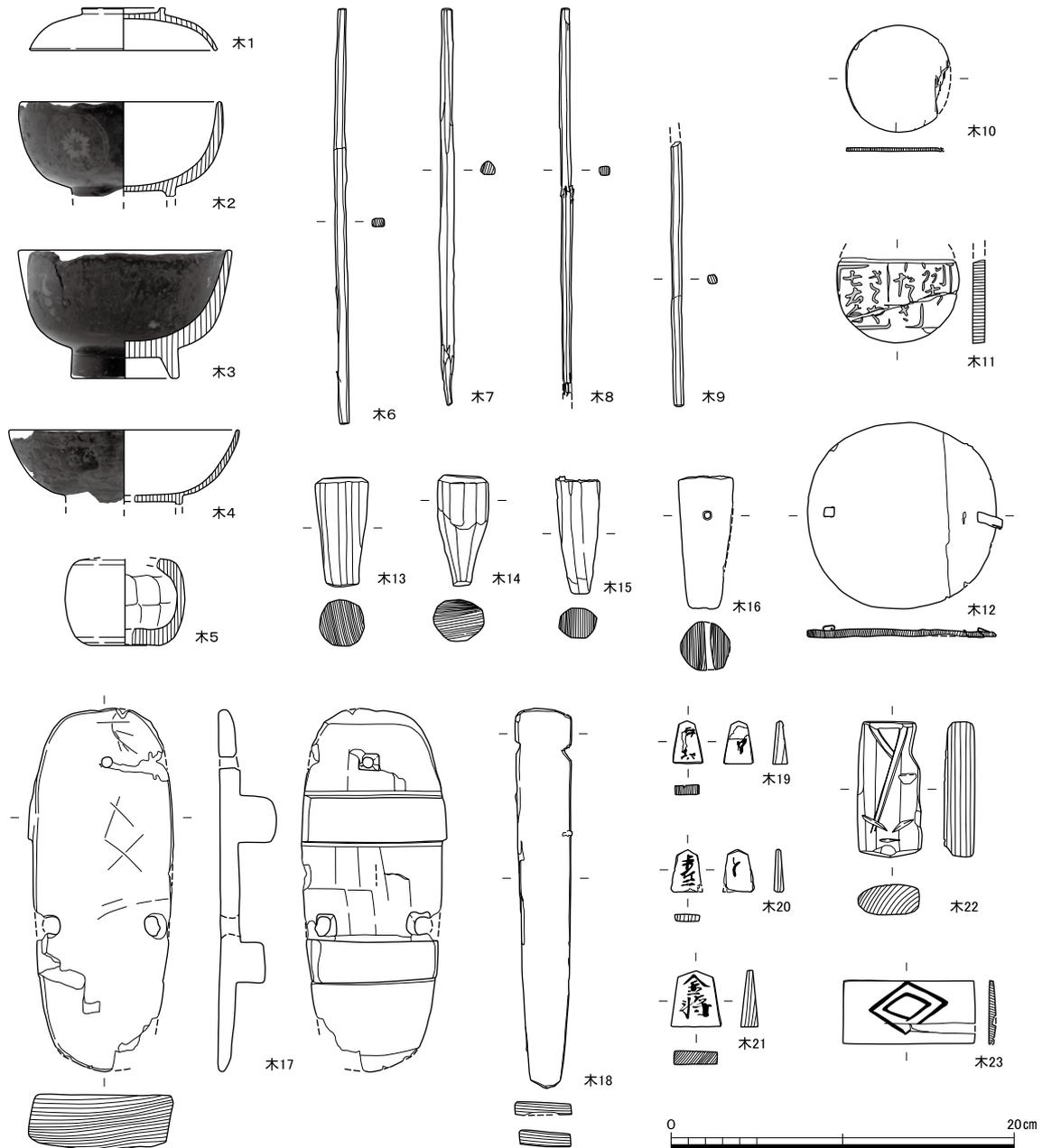


図10 堀13出土木製品実測図（1：4）

は上端1.1cmで下端はわずかに欠損する。厚さは上端0.3～下端0.6cm。樹種はカツラ属か。木19と木20の大きさは、ほぼ同一であった。木21は長さ3.3cm、幅は上端2.1～下端2.9cm、厚さは上端0.4～下端1.0cm。樹種はカヤ。

木22は人形。長さ8.0cm、幅3.8cm、厚さ1.8cm。首から腰にかけての部位であるが、上下ともに差し込み穴などはみられない。表面に着物を陰刻して表現する。樹種はヒノキ属。

木23は板状製品。長さ3.8cm、幅7.7cm、厚さ0.4cm。中央やや上寄りに菱形が二重に墨書される。樹種はヒノキ科。

(5) 骨・貝・種実

堀13から、骨・貝・種実などの動植物遺存体が出土した。

骨は10点出土した。内訳はウシ、イヌ、ネコの腕骨や大腿骨など7点、ヒトの脛骨2点、ブリ属1点である。堀の埋土には貝片や骨片が多量に含まれていたが、基本的小片であったために、採取及び同定は困難であった。

貝は5点出土した。内訳はセタシジミ2点、ドブガイとみられるイシガイ科の貝3点で、いずれも淡水に生息する。

種実などは6点出土した。堀13の上層からはモモやウメの核、中層からはマツ属複維管束亜属の球果（松ぼっくり）やオニグルミなどが出土した。また、中層からマダケが1本出土した。マダケは径1.5cmほどと細く、長さは16cm程で、人為的に切断された痕跡はない。

骨・貝類の詳細な分析については付章1、花粉や植物珪酸体などの自然科学分析については付章2で述べる。

5. まとめ

(1) 調査地の歴史の変遷

平安時代 1区で平安時代前期の土坑を検出した。1区は、平安京右京七条一坊一町の北東隅に位置しており、この土坑は宅地内に掘られたとみられる。また、2区では堀13の東肩の肩部から裾部にかけての堆積土から平安時代前期の遺物が多量に出土した。調査地周辺では、平安時代前期から中期初頭にかけての中・大規模邸宅が確認されている。今回の調査地は、1・2区ともに朱雀大路に面したいわゆる坊城の地であり、近辺に平安時代前期の遺構が存在していたと考えられる。

安土桃山時代以降 2区では御土居の堀の東肩、犬走り、土塁の西裾を検出した。今回の調査地の西側の調査地(図12-XF13-1)では御土居の堀の西肩を確認しており、その調査成果と併せると、御土居の堀は幅13.0～14.0mであったとみられる。また、犬走りは幅1.3mであった。御土居の堀、犬走り、土塁を一連で検出した例は少ない。

堀の埋土からは木製品の出土が多く、埋没時期を示す土器の出土はほとんどなかった。このことから、江戸時代の調査地周辺には遺構の密度が低かったとみられる。堀は、これまでの調査から17世紀代には埋没したとみられ、その後の調査地周辺は、近世、近代と耕作地となった。

(2) 御土居について(図11・12、表4)

今回の調査では、御土居の堀東半の幅8.5mを南北33m分検出した。堀の東側では、犬走り、土塁の一部も確認した。以下では、堀で検出した畝状高まりの特徴や堀の埋没過程、土塁の植栽について、自然科学分析の成果も併せて検討する。

畝状高まり 今回の調査では、堀の肩部から底部にかけてのびる東西方向の畝状高まりと、堀の底部で南北方向の畝状高まりを確認した。このような堀内の畝状高まりは、今回の調査区の北側や南側で行われた図11-XF17-1や図11-SM14の調査でも確認されていることから、少なくとも南北約80mにわたり存在していたことが明らかとなった。

この3つの調査地で確認した畝状高まりは、いずれも基盤層を掘り残して形成され、断面形状は台形を呈する。下幅は1.5～2.2m、上幅は0.3～1.0mで、高さは堀の底面から0.4～0.8mである。東西方向の畝状高まりの間隔は、上面の心々距離で5.0～7.5m、狭いところで4mほどであり、畝状高まりの幅や高さ・間隔は、全体的に不揃いで、規則性がない。また、SM14の調査区と今回の調査区の北端で検出した畝状高まりには、上面の平坦面に灰黄褐色シルトを置き、礫を貼り付けた状況が確認できた。これらの灰黄褐色シルト及び礫は非常に固く締まっていたことも確認されている。

さらに、この畝状高まりは御土居南部の図12-4・6や、今回の調査地のやや南の図12-3でも確認されている。一方で、図12-14や図12-17では確認されていないことから、堀の畝状高まりは、御土居の堀全域でなく、部分的に設けたとみられる。

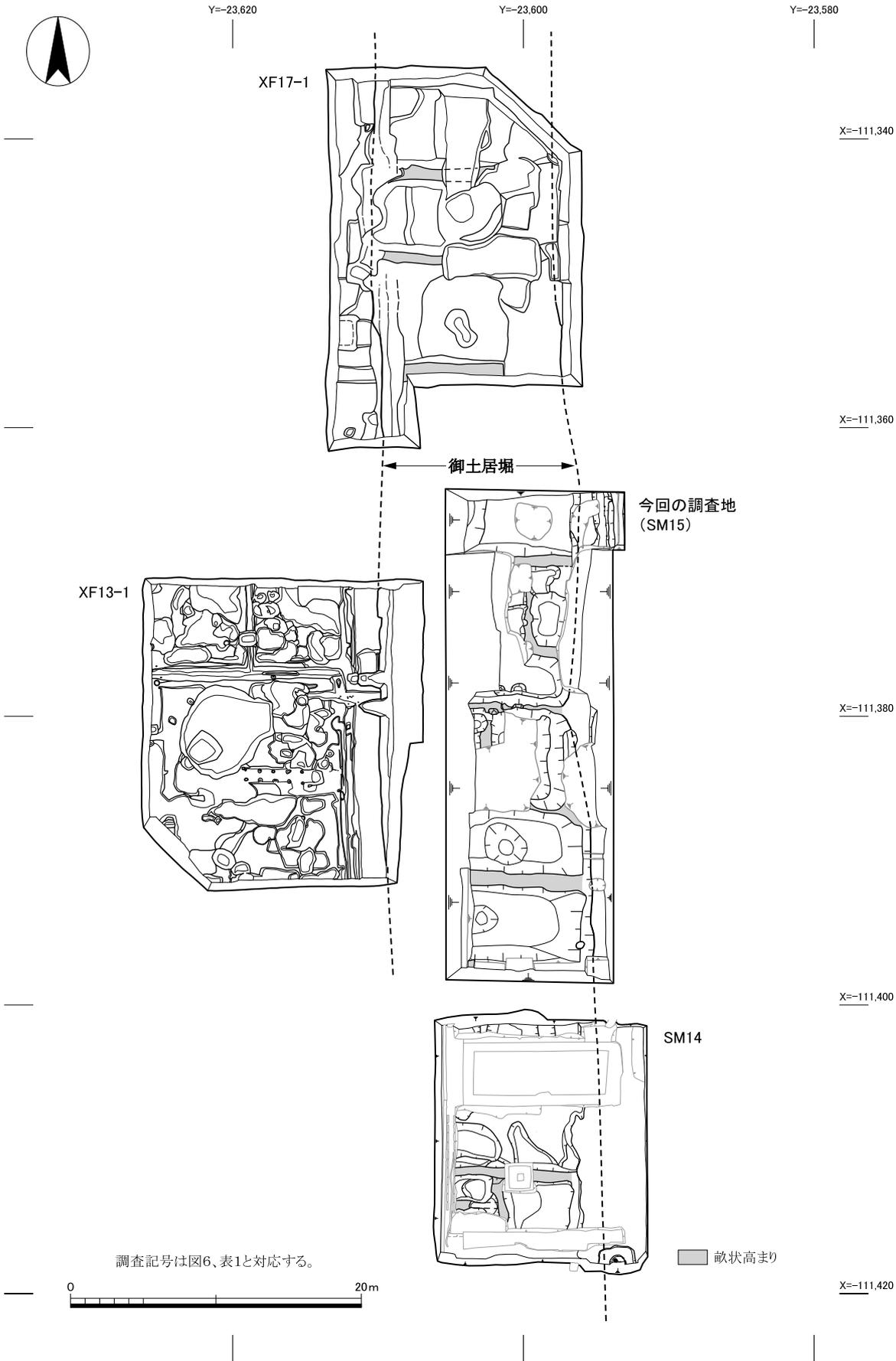


図11 調査地周辺における御土居堀の陥状高まり (1 : 400)

表4 御土居主要調査一覧表

地点番号	調査地	調査期間	調査概要	出土遺物	文献番号
1	北区衣笠荒見町(旧野口町)	1918年	土塁を測量。		1
2	南区西九条春日町13(九条弘道小学校)	1980.09.16～10.09	堀を検出。 幅17.5m、深さ2m。	文楽人形など大量の木製品と共に6体分人骨が出土。	2
3	下京区朱雀堂ノ口町	1982.01.27～10.15	土塁と堀を検出。 土塁は幅20m、高さ2m。 堀は幅20m、深さ2m。		3
4	南区西九条春日町19	1984.05.21～10.01	堀を検出。 幅20m、深さ1.5m。	「天正十三年」(1585)、「慶長□□□」、「甲午 承應」(1654)、「寛文九年」(1669)、「延々宝三年」(1675)の記年銘木簡、キリシタン関係の木簡が出土。	4
5	中京区西ノ京中保町1-4(北野中学校)	1987.10.08～11.30	堀を検出。 堀の南肩幅5m以上、深さ1m。		5
6	南区西九条鳥居口町1	1991.05.01～10.17、 1991.11.05～1992.03.31	堀を検出。 堀の東肩幅14m以上、深さ2.5m。	「□保四年八月中」、「正保四□八月□」(1647)など多数の木簡が出土。	6
7	下京区中堂寺南町地内	1997.07.13～12.19	堀を検出。 堀の西肩幅3m。		7
8	中京区西ノ京円町地内	1997.09.08～1998.02.13	土塁内溝を検出。 幅1.7m、深さ0.3m。		8
9	中京区西ノ京円町55-1	1999.11.01～2000.03.25	土塁基底部と内溝を検出。 基底部は幅13～14m。 内溝は幅2.0m、深さ0.4m。		9
10	北区紫竹上堀川町1、1-15	2000.02.14	土塁基底部の北端を検出。		10
11	下京区中堂寺南町地内	2000.01.18～04.12	堀を検出。 幅12.5m、深さ1.5m。	17世紀後半の陶磁器、寛永通寶20数枚が出土。	7
12	上京区御車道今出川下る二丁目柴町361	2008.02.25	土塁内溝を検出。 幅1.6m以上、深さ0.6m。		11
13	下京区朱雀正会町1-20	2009.03.09～04.30	土塁基底部の一部を検出。		12
14	中京区西ノ京笠殿町38	2012.05.09～09.07	土塁基底部・犬走・堀を検出。 堀の東肩幅14m以上、深さ2m。		13
15	下京区小稲荷町22-2ほか	2013.04.15～08.12	17世紀前半に付け替えられた土塁と土塁外側の排水路を検出。 幅4m以上。		14
16	上京区馬喰町・北町	2013.06.03～08.09	土塁と石組暗渠を検出。 土塁は幅約17m。暗渠長は19.3m。		15
17	南区西九条北ノ内町6・7・8-1	2014.05.21～09.26	堀を検出。 堀の東肩幅8.5m以上、深さ0.75m、南北長45mを検出。	17世紀前半～19世紀の陶磁器類、木製品が出土。	16
18	中京区壬生淵田町7・8	2013.11.29～12.02、2014.09.01～09.19	土塁基底部を検出。 幅20m以上、高さ1m。		17
19	中京区壬生淵田町7・8	2015.01.21～04.30	堀を検出。 堀の西肩幅6m以上、深さ1.7m以上。		18
20	下京区朱雀分木町80番地	2016.07.29～12.07、2017.03.08～06.14	堀を検出。 堀の西肩幅1.2～3.2m、深さ0.6m。		19
21	北区紫野北花ノ坊町31ほか	2016.09.01～12.05	土塁、犬走、堀を検出。 土塁の西半幅16m、高さ約3.6m。 犬走1.9～2.5m。 堀の東肩幅8.6m、深さ5.7m。		20
22	下京区中堂寺南町130番地1	2021.01.18～03.04	堀を検出。 堀の東肩10m、深さ1.5m。	慶長丁銀の極印鑽が出土。	21
23	下京区中堂寺南町130番地1ほか	2022.01.18～03.31	今回の調査。		本報告

城郭の堀障子 上記のような堀の特徴は、城郭の堀の掘削方法の一つである堀障子と非常に類似する。近世の軍学書である有澤武貞『兵法拔書 夫之抄私解』（1707年）や、津軽耕道『武教全書諸説詳論家伝秘抄』（1713年）などによると、堀障子は、縦横に障子（障り）が立てられた堀で、障りになるものは柵の場合もあるが、基本的には堀掘削時に畝が縦横に立つように掘られた。堀障子の機能としては、畝による堀底の移動制限や、畝により滞水した堀底に深泥が溜まることによる防御機能、堀掘削時の湧水の調整機能、標高差のある地形に掘られた堀の底に滞水させるための保水機能があった。

また、2016年に行われた中世城郭研究会によるシンポジウム『「障子堀」の新展開¹⁾』では、広瀬季一郎氏や井上哲朗氏は、堀掘削時に土を運搬するための作業用通路としての機能も指摘している。さらに広瀬氏は、畝を掘り残すことで、堀の掘削土量が減るという利点も挙げている。

御土居の堀と堀障子 今回検出した御土居の堀の畝状高まりは、堀の縦横に設けられていた。畝状高まりを設けた理由として、畝状高まりの上面が平坦で、ある程度の幅があり、礫を敷いていた例もあったことから、堀掘削時の作業用通路となっていたことが想定できる。また、今回検出した堀の底面の標高は23.6～23.8mであり、周辺で検出された室町時代の井戸の底面の標高（24.3m）よりも低いことから、堀掘削時には湧水があり、水への対策として畝を設けていた可能性も考えられる。

堀障子は東日本を中心に確認されており、特に北条氏の城でよく採用されたことがわかっている²⁾。北条氏の小田原城攻めを終えた豊臣秀吉は、総構をもつ小田原城に影響を受けて京都に総構（御土居）を築いたとされるが、秀吉は総構とともに、堀障子についても部分的に御土居に取り入れた可能性がある。今回は可能性の指摘に留め、御土居の堀と城郭の堀障子についての詳細な比較や検討は今後改めて行いたい。

堀の埋没過程 堀の断面土層の観察や自然科学分析（付章2参照）により、堀の掘削から埋没の状況を復元したい。

堀の埋土は大きく3層（上層、中層、下層）に分けられる。堀の埋土には土壌化した層を確認できず、掘削後から完全に埋没するまでの間、水が溜まった状態が継続していたとみられる。

堀掘削時の初期堆積とみられるブロック混じりの土の上には、厚さ1cm弱の粘土や砂の堆積層（下層）が確認でき、これらは堀の掘削時もしくは掘削直後に、周辺の湧水や雨水などの水の流れにより、うすく溜まったものとみられる。また、その直上の粘土層（中層）は、畝状高まりと畝状高まりとの間の凹み部分にのみ堆積していた。この粘土層は、畝状高まりにより仕切られた区画内の堆積土であり、珪藻分析からも非常に濁った泥であったことがわかっている。おそらく湧水や、御土居の特に土塁築造により周辺の排水が滞ったことから、周辺の雨水などが堀に溜まるようになったものとみられる。

堀の埋土上層も、肉眼観察では中層と類似した粘土層であったが、珪藻分析により、中層は滞水状態であったが、上層では流動状態であったことが判明した。中層と上層の堆積時期では堀周辺の環境が大きく変化したことが自然科学分析の結果から明らかとなった。また、水深も深くなり、埋

土上層の粘土層により畝状高まりは完全に埋没したことが土層断面の観察から確認できる。おそらく中層の粘土層の堆積後に、周辺の河川などから取水がなされて、水量が増し、堀内に水の流れが生じたと想定できる。さらに花粉分析からは、埋土上層の堆積時期にはヨモギのような雑草が減少する代わりにベニバナ属やアブラナ科、ソバ属といった栽培種の花粉が増加することがわかっており、調査地周辺では耕作地化が進んだと考えられる。このように自然科学分析から、中層の堆積時期と上層の堆積時期では、堀内の水質や水量だけでなく、調査地周辺の状況も大きく変化したと推測できる。

土塁と竹 これまで、御土居の土塁には竹が植えられており、その竹は竹奉行が管理していたことが指摘されてきた³⁾。そのため、今回実施した堀埋土の花粉分析では、マダケやハチクといったいわゆるオダケの植物珪酸体が検出されることを想定していたものの、分析の結果、ネザサ節型やササ属型、シバ属が多く含まれていたことがわかった。ルイス・フロイスの『日本史』には「都の町の周囲をことごとく堡塁と濠を有する高い城壁で取り囲み、町の装飾となり美観を添えしめるために、その上に繁茂した樹木を植えさせた⁴⁾」とあり、土塁の上に「樹木」を植えたと記される。また、『上下京町々古書明細記』では御土居の「木竹散俵芝手二重目迄」の普請を行ったとの記載もあり、土塁には竹だけでなく、ササ属・シバ属や樹木を植えていたとみられる。

註

- 1) 八巻孝夫編『中世城郭研究 第30号』中世城郭研究会 2016年
- 2) 井上哲朗「第1節 障子堀の分類と編年」『千葉県文化財センター 研究紀要20』財団法人千葉県文化財センター 2000年
- 3) 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察 - 「土居堀」・虎口・都市民 -」『日本史研究』420号 1997年
- 4) ルイス・フロイス「第三十三章 (第三部四十四章)」『日本史2』豊臣秀吉篇Ⅱ (松田毅一、川崎桃太訳) 中央公論社 1977年

文献一覧 (表4 御土居主要調査一覧表)

- 1 西田直二郎・梅原末治「御土居」『京都府史蹟勝地調査会報告 第2冊』京都府 1920年
- 2 「平安京左京九条二坊十三町」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 3 平田 泰ほか「右京七条一坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4 丸川義広ほか「平安京左京九条二坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 5 菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 6 菅田 薫「平安京左京九条二坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年

- 7 平尾政幸ほか『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002 - 6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 8 小檜山一良ほか「平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二~四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 9 小森俊寛ほか「平安京右京一条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 10 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 11 馬瀬智光「御土居跡・寺町旧域 No.21」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年
- 12 小檜山一良『平安京左京七条一坊四町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009 - 1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 13 高橋 潔ほか『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012 - 25 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 14 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013 - 11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 15 南 孝雄「御土居の実像」京都市考古資料館文化財講座第257回 2014年
- 16 松吉祐希ほか『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014 - 9 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 17 鈴木久史「平安京右京四条二坊十一町跡・壬生遺跡・御土居跡 (13H408)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』京都市文化市民局 2015年
- 18 布川豊治ほか『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015 - 1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015年
- 19 柏田有香ほか『平安京右京七条一坊二・四・七・八町跡・御土居跡、堂ノ口遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2017 - 13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 20 持田 透ほか『御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016 - 11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2017年
- 21 柏田有香『平安京右京六条一坊三町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020 - 8 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2021年

付章1 堀13（御土居跡）から出土した動物遺存体

丸山真史（東海大学人文学部）

堀13（御土居跡）から出土した動物遺存体は計15点であり、出土した遺物は堀が埋没した17世紀代のものと考えられる（表1）。動物遺存体の内訳は、貝類5点、魚類1点、哺乳類9点であり、一部の貝類を除いて保存状態は良く、明瞭な解体痕や加工痕が見られるものが含まれる。今回の調査では、これら動物遺存体が含まれる遺構埋土の水洗篩別は実施しておらず、魚類や鳥類などの微細な骨格部位は見逃されている可能性がある。

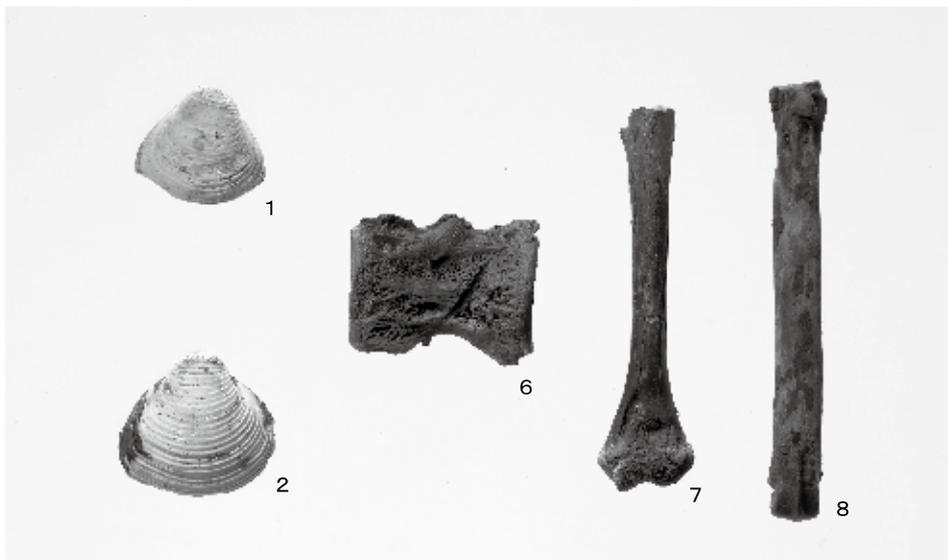
貝類はセタシジミ2点（No.1・2）、イシガイ科3点（No.3～5）を同定した。イシガイ科は保存状態に恵まれず、種の同定には至らない。これらのうち1点（No.3）は左右の殻が合弁状態で出土しており、そのほかの2点は左右のいずれかを特定できない。イシガイ科はいずれも大型個体であり、ドブガイの可能性はある。

魚類は、ブリ属の椎骨1点（No.6）を同定した。尾椎であり、椎体径22.3mmを測り、現生標本との比較では体長80cm前後と推定される。成長とともにツバス、ハマチ、メジロ、ブリなどと呼称がかわる出世魚であり、本資料は最も成長したブリに相当する大きさである。

哺乳類はネコ1点、イヌ3点、ヒト2点、ウシ3点を同定した。ネコは上腕骨（No.7）の近位部から遠位端までが出土しており、遠位端最大幅（Bd）17.0mmを測る。イヌは第3中足骨（No.8）、大腿骨（No.9）、脛骨（No.10）が出土しており、同一個体の可能性がある。大腿骨は最大長196.9mmを測る。長谷部言人（1952）の分類では大級に相当し、西中川ほか（2008）による体高推定式に倣うと体高58.5cmと推定される。現生の秋田犬に相当する大きさであり、絶滅したニホンオオカミの可能性もある。この大腿骨の近位部には浅い3条の切傷がみられ、解体痕と考えられる。また、脛

表1 堀13出土の動物遺存体一覧表

No.	層位	大分類	小分類	部位	左右	備考
1		斧足綱	セタシジミ	殻質	右	
2		斧足綱	セタシジミ	殻質	右	殻高26.9mm、殻長28.0mm
3		斧足綱	イシガイ科	殻皮・殻質	左右	合弁状態で出土、ドブガイ？
4	下層	斧足綱	イシガイ科	殻皮	-	ドブガイ？
5		斧足綱	イシガイ科	殻皮	-	ドブガイ？
6	中層	硬骨魚綱	ブリ属	尾椎骨	-	80cm前後
7		哺乳綱	ネコ	上腕骨	左	Bd17.0mm
8	中層	哺乳綱	イヌ	第3中足骨	右	GL77.8mm
9	下層	哺乳綱	イヌ	大腿骨	右	GL196.9mm、Bp42.3mm、Dp20.8mm、SD15.9mm、Bd33.2mm、Dd37.2mm、解体痕あり
10	下層	哺乳綱	イヌ	脛骨	右	SD15.5mm、Bd24.7mm、近位端未癒合
11		哺乳綱	ヒト	脛骨	右	
12		哺乳綱	ヒト	脛骨	左	
13	中層	哺乳綱	ウシ	脛骨	右	Bp89.0mm
14	中層	哺乳綱	ウシ	脛骨	右	Bp96.6mm
15	中層	哺乳綱	ウシ	脛骨	右	



1・2. セタジミ
 6. プリ属
 7. ネコ
 8～10. イヌ
 11・12. ヒト
 13～15. ウシ



図1 堀13出土の動物遺存体

骨は近位端が癒合していない若い個体である。ヒトはいずれも脛骨 (No.11・12) の骨幹部のみであり、両骨端は欠損している。ウシは、すべて脛骨 (No.13～15) の近位である。後位から前位に向かって鋸を挽いた痕跡がみられる。鋸によって骨幹を切断には至らず、前位1/3程度を残して割り取っている。近世になると、全国的に牛馬の橈骨、脛骨、中手骨・中足骨といった特定部位が骨角器の素材として多用される。本資料は、脛骨のなかで骨角器の素材に適した骨幹部を得るために、骨端部が除去された廃材である。3点ともに同様の形状を呈することから、一定の作法で加工されたのであろう。出土量が少ないため、詳細は明らかにならないが、骨角器製作の職人が近郊にいた可能性もある。

魚貝類は食用になった可能性が高いが、イシガイ科は合弁状態のものがあり、自然に生息していた個体である可能性もある。イヌと同定したものは、大きさでは明治時代に奈良県吉野村での捕獲を最後に絶滅したとされるニホンオオカミの可能性もある。ただ、解体痕がみられることから食用となった可能性が高く、イヌと考える方が自然かもしれない。一方、ネコは食用か定かではない。ウシの脛骨が骨角器の廃材であり、同一部位のみが出土していることから、別の場所で屠殺され、選別された骨が遺跡近郊に持ち込まれたと考えられる。以上のように、出土量は少数ながら、御土居には多様な用途に供された動物遺存体が投棄されていることが明らかになり、周辺の生活を示すものとして貴重な資料である。

参考文献

長谷部言人1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁 pp.146-150

西中川駿・福島晶・谷山敦・池田省吾・土岐学司・小山田和央・松本光春2008「イヌの骨計測値から骨長並びに体高の推定法」『動物考古学』第25号 動物考古学研究会 pp.1-11

付章2 自然科学分析

株式会社パレオ・ラボ

(1) 珪藻分析

1. はじめに

本稿では、御土居の堀埋土について珪藻分析を行い、堆積環境の検討を行う。

2. 試料と処理・分析方法

分析試料は、堀13の西壁断面において、堀の基底から高さ1.25 mまでの深度で採取された、以下の試料番号No.1～No.3の3点の泥質堆積物である(表1)。試料採取地の堆積状況を記載した柱状図と試料採取位置を、珪藻分析結果のダイアグラムの図1に併せて示している。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。(1) 秤量した試料をビーカーに移して30%過酸化水素水を加えて反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。上澄み液が透明になるまでこの作業を繰り返した。(3) 遠心管に回収した懸濁残渣をシリンジで適量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

3. 結果

3試料の検鏡の結果、どの試料も1 gあたり106個以上の珪藻殻が産出し、31属57種59分類群の珪藻種が同定された(表2、図1)。

3試料いずれからも、浮遊性種である*Cyclotella*属や*Melosira*属、*Aulacoseira*属の産出が見られ、ある程度水深のあった環境で堆積したと推定される。以下、種の特徴の説明にあたっては、主に小杉(1988)および安藤(1990)が設定し、千葉・澤井(2014)により再検討された環境指標種群(表3)を用いた。また、産出率が3%を超えた珪藻については、図2に写真を掲載した。

9層(試料3)では、淡水生公布種の*Stephanodiscus hantzschii*が第一優占種で、次いで最下流性河川指標種の*Cyclotella meneghiniana*や湖沼沼沢湿地指標種の*Aulacoseira ambigua*が産出した。

6層(試料2)では、*Stephanodiscus hantzschii*に替わって*Cyclotella meneghiniana*が第一優占

表1 試料一覧

調査区	採取位置	層名 ※	試料番号	岩質	標高(m)	計量(g)
2区	調査区 西壁断面	5層	1	N6/0灰色シルト質粘土	24.9m	0.5
		6層	2	N6/0灰色シルト質粘土	24.5m	0.52
		9層	3	N6/0灰色シルト質粘土	24.0m	0.5

※ 本文図版3に対応

表2 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

No.	分類群	種群	1	2	3	No.	分類群	種群	1	2	3		
1	<i>Pseudostauron</i>	<i>brevistriata</i>	E2	0	0	0	39	<i>Synedra</i>	<i>ulna</i>	W	5	0	0
2	<i>Cocconeis</i>	<i>placentula</i>	F	0	0	0	40	<i>Cratocula</i>	<i>cuspidata</i>	?	7	1	0
3	<i>Cymbella</i>	<i>tumida</i>	F	5	0	1	41	<i>Cyclotella</i>	<i>atomus</i>	?	5	35	21
4	<i>Eunotia</i>	<i>praerupta</i>	F	0	0	3	42	<i>Cymbella</i>	<i>silesiaca</i>	?	2	0	3
5	<i>Achnanthes</i>	<i>hungarica</i>	K	19	31	5	43	<i>Gomphonema</i>	<i>prodestum</i>	?	0	1	0
6	<i>Melosira</i>	<i>varians</i>	K	15	12	5	44	<i>Gomphonema</i>	<i>pseudophaerophorum</i>	?	0	0	0
7	<i>Planohidium</i>	<i>lanceolatum</i>	K	9	10	7	45	<i>Gomphonema</i>	<i>trurris</i>	?	1	0	2
8	<i>Reimeria</i>	<i>sinuata</i>	K	0	0	0	46	<i>Hippodonta</i>	<i>capitata</i>	?	7	1	0
9	<i>Rhoicosphenia</i>	<i>curvata</i>	K	0	0	1	47	<i>Navicula</i>	<i>fossilis</i>	?	0	5	0
10	<i>Cyclotella</i>	<i>meneghiniana</i>	L	144	103	34	48	<i>Navicula</i>	<i>subrosellata</i>	?	1	1	1
11	<i>Aulacoseira</i>	<i>granulata</i>	M	3	6	6	49	<i>Navicula</i>	spp.F	?	8	6	11
12	<i>Cyclotella</i>	<i>stelligera</i>	M	0	3	9	50	<i>Nitzschia</i>	<i>capitellata</i>	?	0	1	0
13	<i>Aulacoseira</i>	<i>ambigua</i>	N	13	10	22	51	<i>Nitzschia</i>	spp.F	?	3	0	0
14	<i>Gomphonema</i>	<i>acuminatum</i>	O	0	0	0	52	<i>Nitzschia</i>	<i>paleacea</i>	?	0	2	18
15	<i>Pinnularia</i>	<i>gibba</i>	O	0	0	0	53	<i>Nitzschia</i>	<i>pavulodes</i>	?	1	0	0
16	<i>Stauroneis</i>	<i>phoenicentron</i>	O	1	0	1	54	<i>Pinnularia</i>	spp.F	?	9	10	2
17	<i>Hantzschia</i>	<i>amphioxys</i>	Qa	0	1	4	55	<i>Pinnularia</i>	<i>parvullissima</i>	?	0	0	0
18	<i>Diademsis</i>	<i>contenta</i>	Qa	0	1	0	56	<i>Pinnularia</i>	<i>septentrionalis</i>	?	0	0	2
19	<i>Achnantheidium</i>	<i>minutissimum</i>	Qb	2	3	0	57	<i>Placoneis</i>	<i>clementis</i>	?	0	1	0
20	<i>Amphora</i>	<i>ovalis</i>	W	6	4	0	58	<i>Sellaphora</i>	spp.F	?	2	1	0
21	<i>Amphora</i>	<i>veneta</i>	W	2	3	2	59	<i>Sellaphora</i>	<i>stoemii</i>	?	0	0	0
22	<i>Bacillaria</i>	<i>paxillifer</i>	W	0	1	2				E2	0	0	0
23	<i>Stephanodiscus</i>	<i>hantzschii</i>	W	2	2	121				F	5	0	4
24	<i>Epithemia</i>	<i>turgida</i>	W	0	0	0				K	43	53	18
25	<i>Gomphonema</i>	<i>parvulum</i>	W	16	12	13				L	144	103	34
26	<i>Gomphonema</i>	<i>truncatum</i>	W	1	1	1				M	3	9	15
27	<i>Gyrosigma</i>	<i>procerum</i>	W	9	6	3				N	13	10	22
28	<i>Navicula</i>	<i>cryptocephala</i>	W	8	17	6				O	1	0	1
29	<i>Navicula</i>	<i>cryptotenella</i>	W	3	10	8				Qa	0	2	4
30	<i>Navicula</i>	<i>gregaria</i>	W	0	1	1				Qb	2	3	0
31	<i>Neidium</i>	<i>bisulcatum</i>	W	1	1	0				W	65	71	165
32	<i>Nitzschia</i>	<i>amphibia</i>	W	6	1	5				?	46	65	60
33	<i>Nitzschia</i>	<i>tryblionella</i> var. <i>salinarum</i>	W	1	0	0							
34	<i>Pinnularia</i>	<i>viridis</i>	W	0	0	0							
35	<i>Surirella</i>	<i>angusta</i>	W	1	3	0					5		4
36	<i>Surirella</i>	<i>linearis</i>	W	0	0	0					317	316	319
37	<i>Surirella</i>	<i>tenera</i>	W	0	1	0					322	316	323
38	<i>Synedra</i>	<i>rumpens</i>	W	4	8	3							
									堆積物1g中の数(個)				
									17710000	17380000	8882500		

表3 環境指標種群

種群名(以下、「指標種群」を略す)	環境指標となる現生種の出現環境や生態学的特徴など	本分析で産出した[代表種]・主要構成種・標徴種・不定
淡水底生	塩分が2‰以下の淡水域の底質や水草に付着する(河岸や湖岸)	<i>Cocconeis placentula</i> , <i>Cymbella tumida</i> , <i>Stauroneis phoenicentron</i>
中～下流性河川	中下流域に出現する(河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地)	<i>Melosira varians</i> , <i>Planohidium lanceolatum</i> , <i>Reimeria sinuata</i>
最下流性河川	最下流域の三角州に集中して出現する	<i>Cyclotella meneghiniana</i>
湖沼浮遊性	水深が1.5m以上で水生植物が水底に生息していない湖沼に生息する	<i>Discotella stelligera</i> , <i>Aulacoseira granulata</i>
湖沼沼沢湿地	湖沼において浮遊性種および付着性種として優占する	<i>Aulacoseira ambigua</i>
沼沢湿地付着性	水深が1.0m内外で、湿地及び植物が一面に繁茂している沼沢湿地において、付着状態で生育する	<i>Gomphonema acuminatum</i>
陸生A	耐乾性が強い	<i>Navicula contenta</i> , <i>Hantzschia amphioxys</i>
陸生B	陸生A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する	<i>Achnantheidium minutissimum</i>

代表種とは「その環境のみに出現し、かつ高率である種」、主要構成種とは「他の環境にも出現するが、そこで群集に主要な構成要素となる種」、標徴種とは「高率には出現しないが、その環境の良い指標となる種」を指す。また、種まで同定できなかった分類群や生態未詳な種、生態に幅のある種などに対しては、海水不定・不明種、海～汽水不定・不明種、汽水不定・不明種、公布種、不定種、不明種に割り振り、計上する。

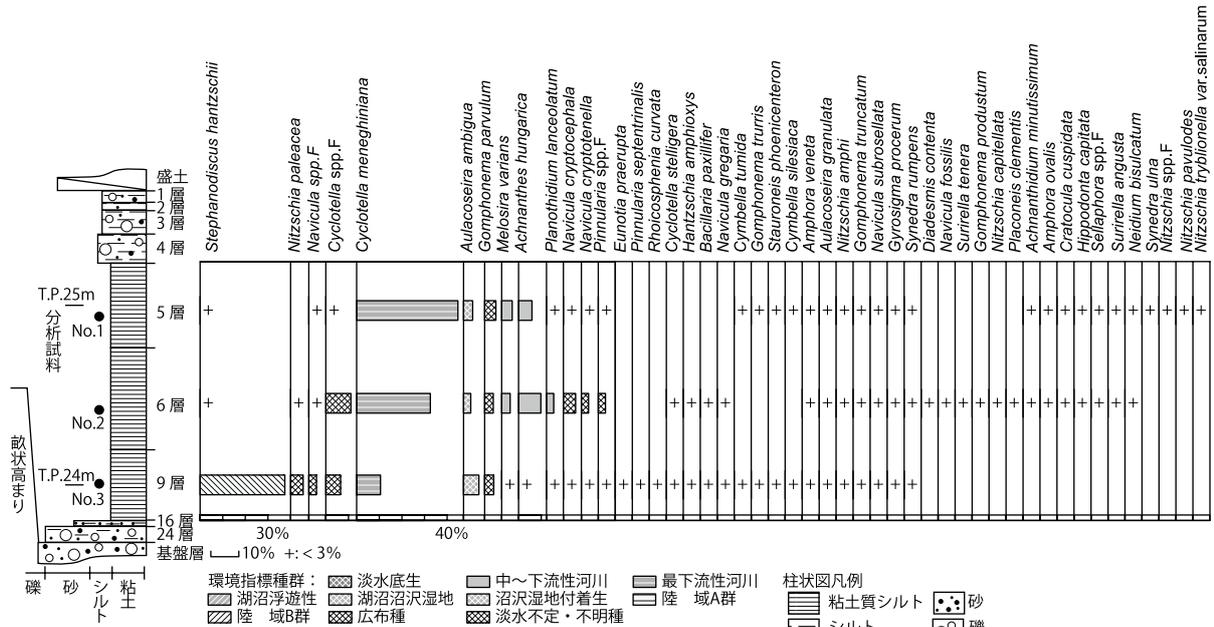


図1 珪藻分析結果

種となり、*Cyclotella atomus*も割合が増す。中～下流性河川指標種の*Achnanthes hungarica*をはじめ、*Navicula*属などの付着性種も増加している。

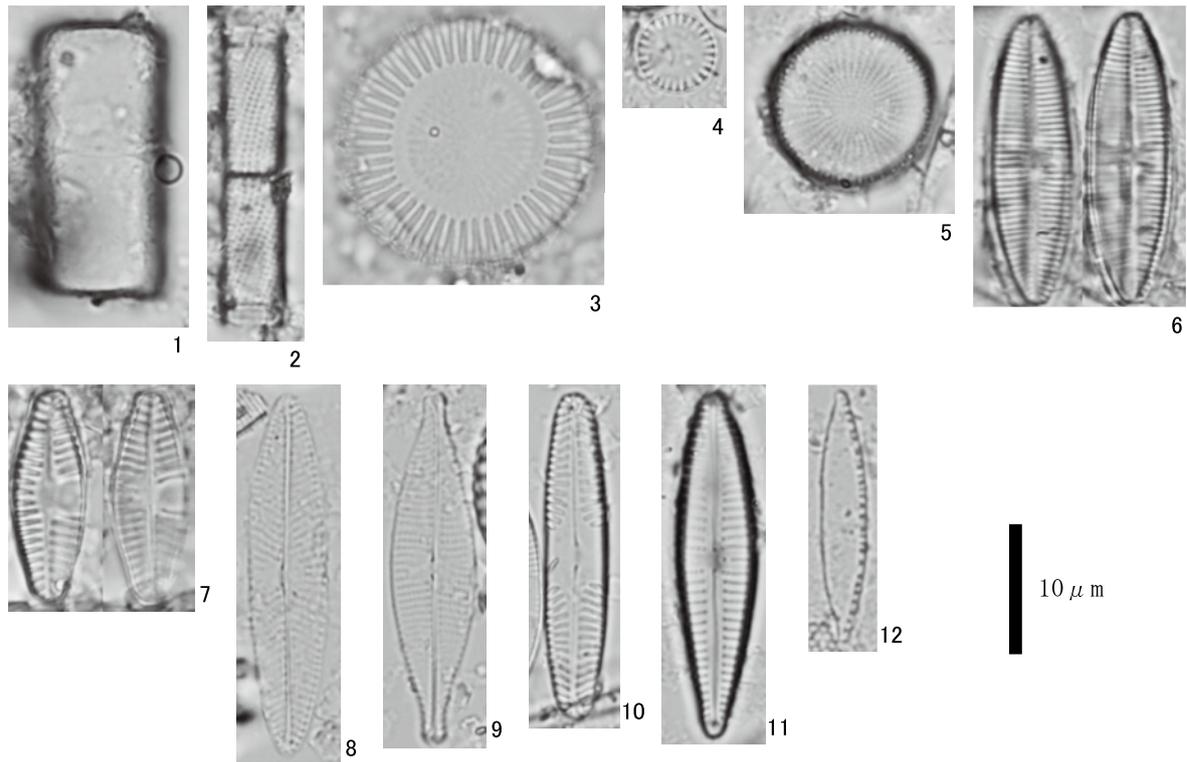
5層（試料1）では、*Cyclotella meneghiniana*が半数近くを占めている。その他では*Achnanthes hungarica*や*Aulacoseira ambigua*、淡水生公布種の*Gomphonema parvulum*が5～6%産出している。

4. 考察

今回分析試料を採取した御土居の堀埋土のうち泥質堆積物については、下位から9層、6層、5層の順に累重する。また、5層直上には、層相から耕作土と判断できる4層～1層が形成されている。分析試料は、塊状無層理をなすシルト質粘土層の9層（堀埋土中層）、6層（堀埋土上層）、5層（堀埋土上層）において各層1点ずつ採取している。なお、堀の基底層は、完新世に形成された扇状地堆積物の砂～礫層で構成される。

発掘調査で検出された御土居の堀は、18世紀初頭の「御土居絵図」に図示されておらず、該当する部分に水路と認識される溝が描かれているのみである。よって、「御土居絵図」が作成された時期には、既に今回検出された堀が存在していなかったと考えられる。「御土居絵図」の図像と書誌的情報と、御土居の構築および完成時期が16世紀末である状況をふまえると、今回採取した堀埋土の泥層は、16世紀末から18世紀初頭までに累重した可能性がある。

堀の基底層～下半部に堆積する9層の底部付近では、中心目珪藻の*Stephanodiscus hantzschii*が多産する。本種は、環境指標種群において淡水の広布種に相当しており、渡辺ほか（2005）では「富栄養化した水域を特徴づける種で、かなりの汚濁に耐えられる種である」とされる。いっぽうで、堀埋土の上半部に堆積する堀上層埋土の6層・5層では、環境指標種群において三角州に集中



1. *Melosira varians* 2. *Aulacoseira ambigua* 3. *Cyclotella meneghiniana*
 4. *Cyclotella atomus* 5. *Stephanodiscus Hantzschii* 6. *Achnanthisidium hungarica*
 7. *Achnanthisidium lanceolatum* 8. *Navicula cryptotenella* 9. *Navicula cryptocephala*
 10. *Pinnularia* spp. F 11. *Gomphonema parvulum* 12. *Nitzschia paleacea*

図2 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

して出現する最下流性河川の指標とされる中心目珪藻の *Cyclotella meneghiniana* が多産する。本種は、流速の遅い下流域の三角州平野から河口付近の一定の水深のある、流速の遅い河川水中を浮遊しながら生育する (安藤, 1990)。さらに、*Cyclotella meneghiniana* が第一優占種となる水域は、生息生物を基準に汚濁度を4段階に分けた場合の、良好な方から2段階目のβ中腐水性の止水域を示すとされる (渡辺ほか, 2005)。

9層では、特定の環境を指標できないものの淡水域に広く生育する *Stephanodiscus hantzschii* が良好な保存状態で産出する。珪藻化石の産出状況から、9層堆積時の堀底には、水域が存在していたと判断できる。さらに、発掘調査結果と堀埋土の堆積状況をふまえると、畝状高まりに仕切られた凹地をなす堀底において、9層段階に形成された水域は、底部に泥が堆積する極浅い滞水域であったと考えられる。また、9層段階の滞水域については、汚濁度から閉塞し富栄養化した汚い水域環境であったと捉えられる。

なお、発掘結果から、9層上面の標高は、調査区内で検出された古代の井戸底部の湧水点よりも低い状況が判明している。近傍の発掘調査区で検出された古代～中世の井戸の湧水点は、9層上面の標高より低い傾向がある。古代から近世初頭までに地下水位の変動が生じていた可能性はあるものの、井戸の発掘調査結果をふまえると、9層段階に形成されていた水域は、周囲から流入した

地表水以外に、地下水による涵養もあった可能性がある。

堀上半部に堆積する6層と5層で多産する*Cyclotella meneghiniana*の生態性から、当該層準は、湖沼や池沼のような止水域ではなく、緩やかながら水の流れが生じていたと考えられる。また、汚濁度についてみると、9層から上位の6層・5層にかけては、水質的にややきれいになったと捉えられる。珪藻化石群集にもとづくと、5層・6層では、緩やか水の流れが生じながら、わずかに水の交換があるような水域環境にあったと考えられる。6層・5層段階には、9層段階に機能していた畝状の高まりの頂部を埋積して泥層が累重するようになる。このような6層・5層段階には、9層で多産した*Stephanodiscus hantzschii*がほぼ産出しなくなる。堀埋土の珪藻化石群集の層位的変動と、現地での堆積状況の観察結果をふまえると、9層から6層・5層にかけては、相対的に水深が大きくなるような水域の変化が生じていたと解釈できる。

なお、5層ではやや減少するものの、6層で約10%産出する羽状目珪藻の*Achnanthes hungarica*は、河川沿いの河成段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに出現して、流水に適応した水中の底で付着生活する中～下流性河川指標種である。上述の6層・5層の水域環境にもとづくと、*Achnanthes hungarica*の産出は、河川や水路などの堀以外の場所からの流入が考えられるとともに、9層から5層・6層にかけての水域環境の変遷をもたらした水の流入を示している可能性がある。

以上、今回分析した御土居の堀内では、9層段階において周囲から流れ込んだ栄養塩類が集積する富栄養化した、閉鎖的でかなり浅い水域が形成されていたと捉えられる。5層・6層段階には、下位の9層段階に比べ水深が大きくなるとともに、周囲の河川や水路から水が供給され、緩やかな水の流れが生じながら、堀内の水が少しずつ交換されていくような水域環境が形成されていたと考えられる。珪藻化石群集と堀埋土の堆積状況にもとづくと、5層・6層段階の御土居の堀内では、溜池のような一定以上の水深が保たれる水域が形成されていた時期が存在した可能性がある。ただし、推定される堆積期間から、5層・6層は、周囲から泥質堆積物が多量に流れ込み、急速に埋積が進む状況であったと推定される。さらに、堀断面の堆積状況からは、5層・6層において浚渫などが行われず、埋没した後にそのまま放棄された状況が推測される。

(石川 智・辻 康男)

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標种群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.
千葉 崇・澤井裕紀 (2014) 環境指標种群の再検討と更新. Diatom, 30, 7-30.
小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標种群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.
渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 (2005) 淡水珪藻生態図鑑. 784p, 内田老鶴圃.

(2) 花粉分析、プラント・オパール分析

1. はじめに

本稿では、御土居の堀埋土について花粉分析とプラント・オパール分析を行い、遺跡周辺の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて珪藻分析も行われている（珪藻分析の項参照）。

2. 試料と方法

(1) 試料

分析試料は、堀埋土の泥質堆積物3点である。この遺構には粘土層が堆積しており、下位からNo.3（9層）、No.2（6層）、No.1（5層）が採取された。試料の岩質や堆積状況は、珪藻分析の項に記載している（珪藻分析の項参照）。これらの試料を用いて、次の手順で分析を実施した。

(2) 花粉分析

試料（湿重量約3～4 g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。プレパラートは樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3557～3564）を作製し、写真を図5に載せた。

(3) プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1 g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02 gのガラスビーズ（直径約0.04 mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30 cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01 mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、図6に載せた。

3. 結果

(1) 花粉分析

3試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉30、草本花粉31、形態分類を含むシダ植物胞子4の、総計65である。これらの花粉・胞子の一覧表を表4に、分布図を図3に示した。分布図における樹木花粉の産出率は、樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産出率は、産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科とマメ科の花粉には樹木起源

表4 産出花粉孢子一覽表

学名	和名	No. 1	No. 2	No. 3
樹木				
<i>Abies</i>	モミ属	3	1	0
<i>Tsuga</i>	ツガ属	3	3	2
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	58	91	67
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	0	1	1
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	28	13	20
Taxaceae—Cephalotaxaceae—Cupressaceae	イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	0	1	0
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	1	0
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属	2	0	3
<i>Pterocarya—Juglans</i>	サワグルミ属—クルミ属	3	2	1
<i>Carpinus—Ostrya</i>	クマシデ属—アサダ属	7	12	3
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	5	3
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	9	5	7
<i>Fagus</i>	ブナ属	2	1	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	21	17	32
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	30	23	30
<i>Castanea</i>	クリ属	6	4	21
<i>Castanopsis—Pasania</i>	シイノキ属—マテバシイ属	0	1	1
<i>Ulmus—Zelkova</i>	ニレ属—ケヤキ属	4	2	0
<i>Celtis—Aphananthe</i>	エノキ属—ムクノキ属	10	11	3
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	2	0	0
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	0	0	1
Celastraceae	ニシキギ科	1	0	0
<i>Acer</i>	カエデ属	5	3	0
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	1	0	0
Araliaceae	ウコギ科	0	0	1
<i>Cornus</i>	ミズキ属	0	0	1
Ericaceae	ツツジ科	0	1	0
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	2	1	0
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	1	0	0
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	6	1	0
草本				
<i>Typha</i>	ガマ属	1	0	1
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	10	2	1
Gramineae	イネ科	383	313	373
Cyperaceae	カヤツリグサ科	0	1	0
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	1	0	0
Moraceae	クワ科	0	2	13
<i>Rumex</i>	ギンギン属	5	13	8
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria—Echinocaulon</i>	サナエタデ節—ウナギツカミ節	1	7	0
<i>Polygonum</i> sect. <i>Reynoutria</i>	イタドリ節	1	0	1
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	2	1	0
Chenopodiaceae—Amaranthaceae	アカザ科—ヒユ科	63	36	74
<i>Portulaca</i>	スベリヒユ属	2	5	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	12	13	24
Ranunculaceae	キンボウグ科	0	1	0
<i>Macleaya</i>	タケニグサ属	1	0	0
Brassicaceae	アブラナ科	114	64	58
Leguminosae	マメ科	1	0	3
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	0	2	3
<i>Trapa</i>	ヒシ属	2	4	0
<i>Hydrocotyle</i>	チドメグサ属	2	0	2
Apiaceae	セリ科	3	6	2
Labiatae	シソ科	1	1	0
<i>Solanum</i>	ナス属	33	15	1
<i>Justicia</i>	キツネノマゴ属	0	1	0
<i>Plantago</i>	オオバコ属	0	4	7
<i>Actinostemma—Gynostemma</i>	ゴキツル属—アマチャヅル属	7	2	0
<i>Cucumis</i>	キュウリ属	0	2	1
<i>Carthamus</i>	ベニバナ属	49	75	8
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	46	28	323
Tubuliflorae	キク亜科	3	1	3
Liguliflorae	タンポポク亜科	1	0	4
シダ植物				
<i>Salvinia</i>	サンショウモモ属	8	11	2
<i>Azolla</i>	アカウキクサ属	0	1	0
monolete type spore	単条溝孢子	1	1	0
trilete type spore	三条溝孢子	9	7	2
Arboreal pollen	樹木花粉	208	200	201
Nonarboreal pollen	草本花粉	744	599	911
Spores	シダ植物孢子	18	20	4
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	970	819	1116
unknown	不明	10	6	6

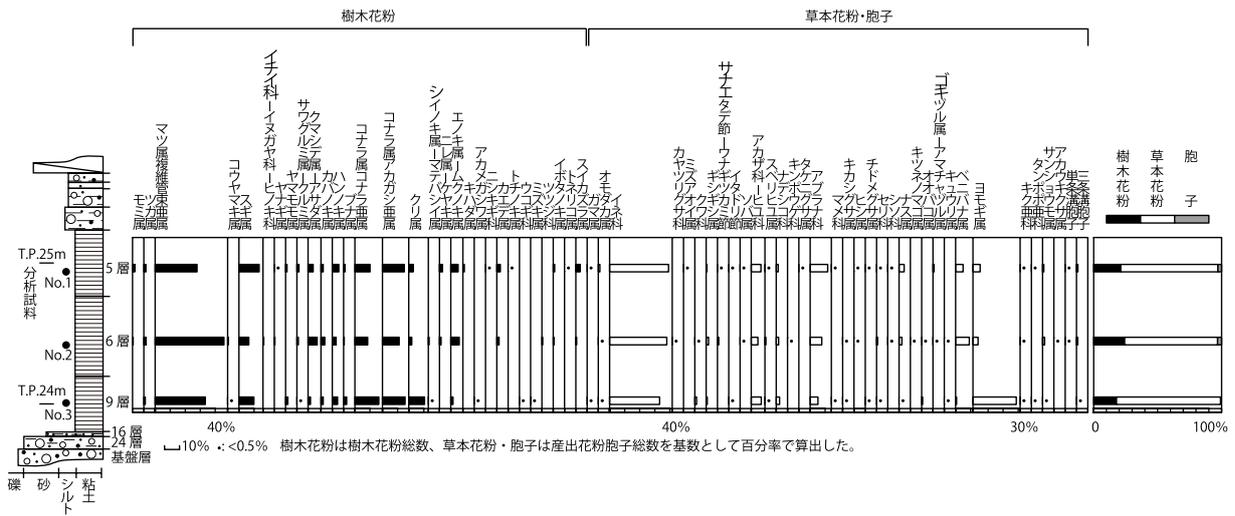


図3 花粉分布図

と草本起源の分類群があるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

樹木花粉では、いずれの試料においてもマツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの産出が目立つ。クリ属についてはNo.3で産出が目立つ。草本花粉では、イネ科やアカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ベニバナ属などの産出が目立つ。

(2) プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から、試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め、結果を表5と図4に示した。検鏡の結果、3試料からはイネとネザサ節型、ササ属型、ヨシ属、シバ属、キビ族、ウシクサ族の7種類の機動細胞珪酸体が

表5 試料1g当りのプラント・オパール個数

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
No.1	95,800	2,900	31,900	2,900	0	10,200	16,000	23,200	17,400
No.2	67,000	11,400	4,900	3,300	6,500	3,300	32,700	36,000	14,700
No.3	43,900	1,600	29,800	4,700	3,100	4,700	15,700	14,100	36,000

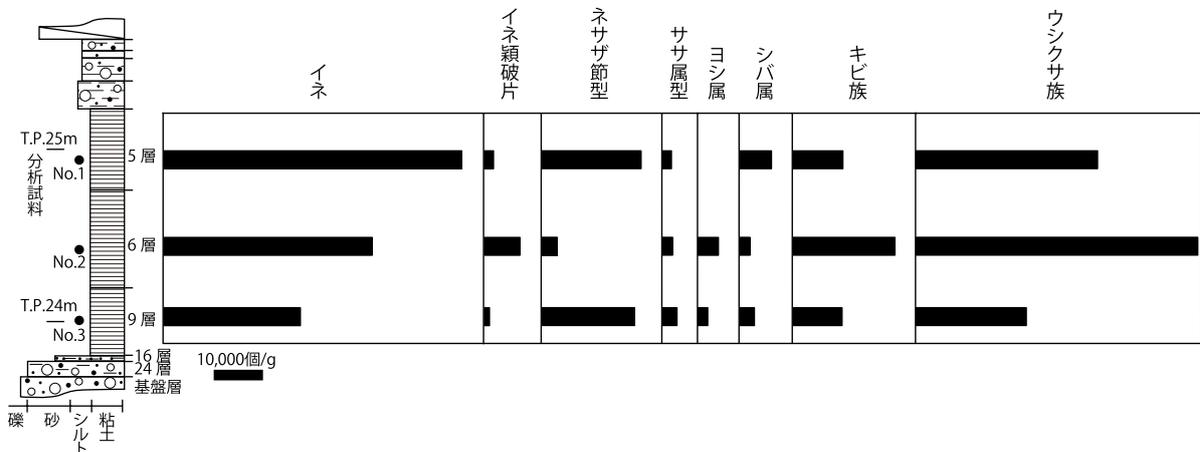


図4 植物珪酸体分布図

確認できた。また、イネの籾殻に形成される珪酸体（イネ類破片）の産出も確認できた。これらのうち、イネ機動細胞珪酸体については上位層準に向かって増加する。ネザサ節型機動細胞珪酸体については、No.2では産出量が少ないものの、No.1とNo.3では産出量が多い。

4. 考察

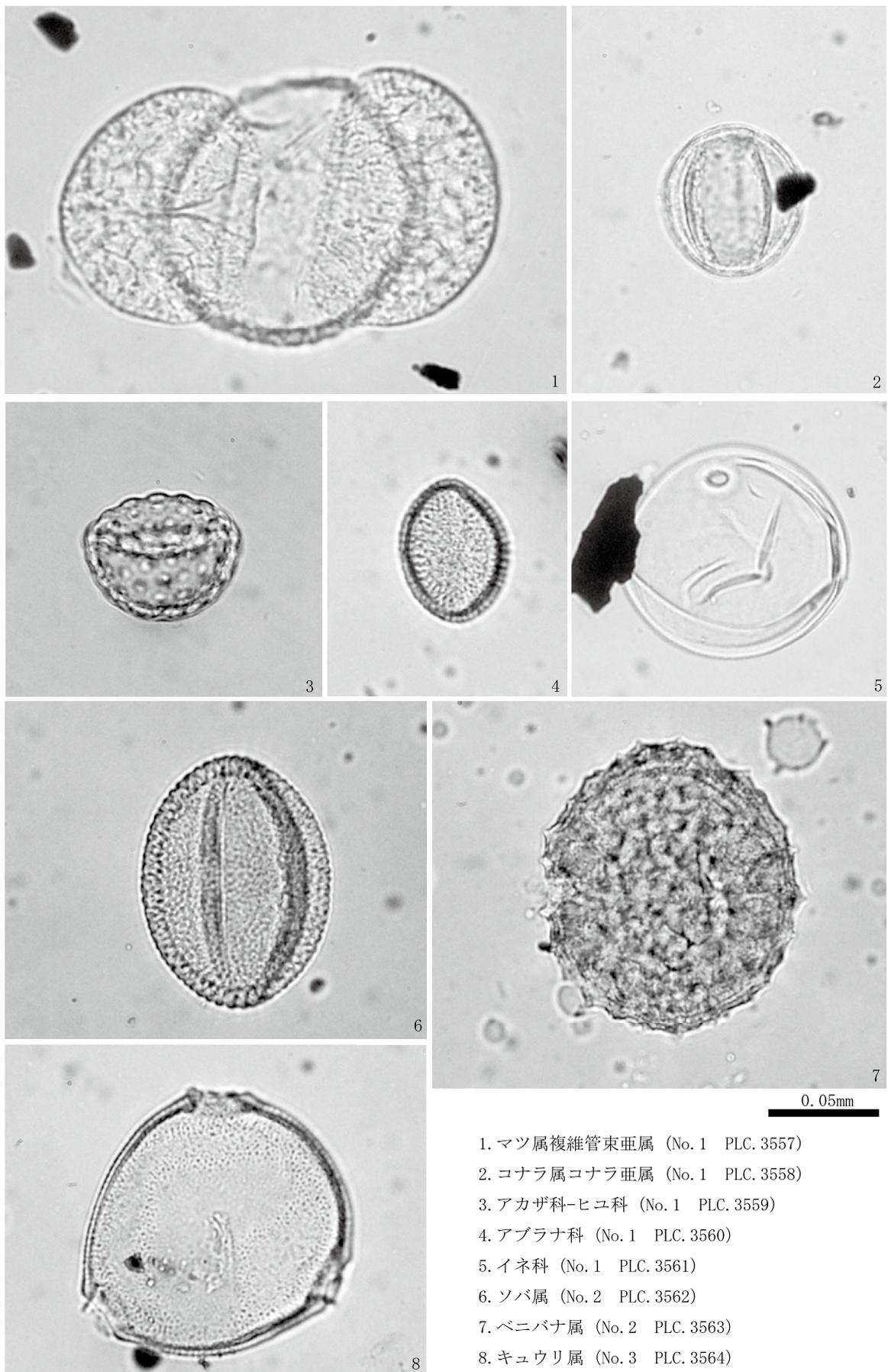
プラント・オパール分析の結果では、いずれの試料においてもネザサ節型やササ属型の機動細胞珪酸体が産出しており、特にネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が目立つ。ネザサ節型とした機動細胞珪酸体の形態の特徴は、側長幅が大きく、裏面が丸みを帯びている（図6-4・5）。杉山・藤原（1986）によると、メダケ属（ネザサ節）やシホウチク属、オカメザサ属、トウチク属、ナリヒラダケ属、カンチク属などにこのタイプの珪酸体が見られる。また、ササ属型とした機動細胞珪酸体の形態の特徴は、側長幅が小さく、平面的であり、特異な断面形状を示す（図6-8・9）。杉山・藤原（1986）によると、ササ属のチシマザサ節やチマキザサ節、スズタケ節、ミヤコザサ節などにこのタイプの珪酸体が見られる。ササ属のチシマザサ節とチマキザサ節は主に日本海側の多雪地帯に分布しており、他の分類群については京都に分布していても不自然ではないが、今回の結果から考えると、御土居の土塁斜面においてメダケなどの大型のタケが優占するような竹林の成立について言及するのが難しい。メダケのような中型の種類が存在していたか、ネザサ節型やササ属型とした機動細胞珪酸体を供給する小型のタケ類やササ類を中心した植生の可能性があるが、さらなる種の特定は、機動細胞珪酸体の細部の同定なども含め今後検討課題と考えられる。

なお、ネザサ節型機動細胞珪酸体については、産出量が6層（No.2）で大幅に減じており、代わって、キビ族やウシクサ族の産出量が増える。6層（No.2）の堆積時期の土塁上では、ネザサ節型のササ類は分布が縮小し、キビ族やウシクサ族が分布を広げていた可能性がある。ササ類の縮小要因については、現段階で不明である。ただし、堀埋土の断面には、土塁斜面の崩壊や掘削などによる破壊等の痕跡が認められない。よって、ササ類の縮小要因としては、土塁斜面の地形変化であったとは考えにくく、人為による植生の刈り払いなどに起因している可能性がうかがえる。

また、飯塚・近藤（2011）によれば、古記録から御土居の土塁（のり面）上に芝生等の被覆緑化がなされていた状況が指摘されている。今回の分析結果でも、いずれの試料においてもシバ属機動細胞珪酸体が産出しており、土塁斜面上には、タケ・ササ類の他にシバ属も生育していた可能性がある。

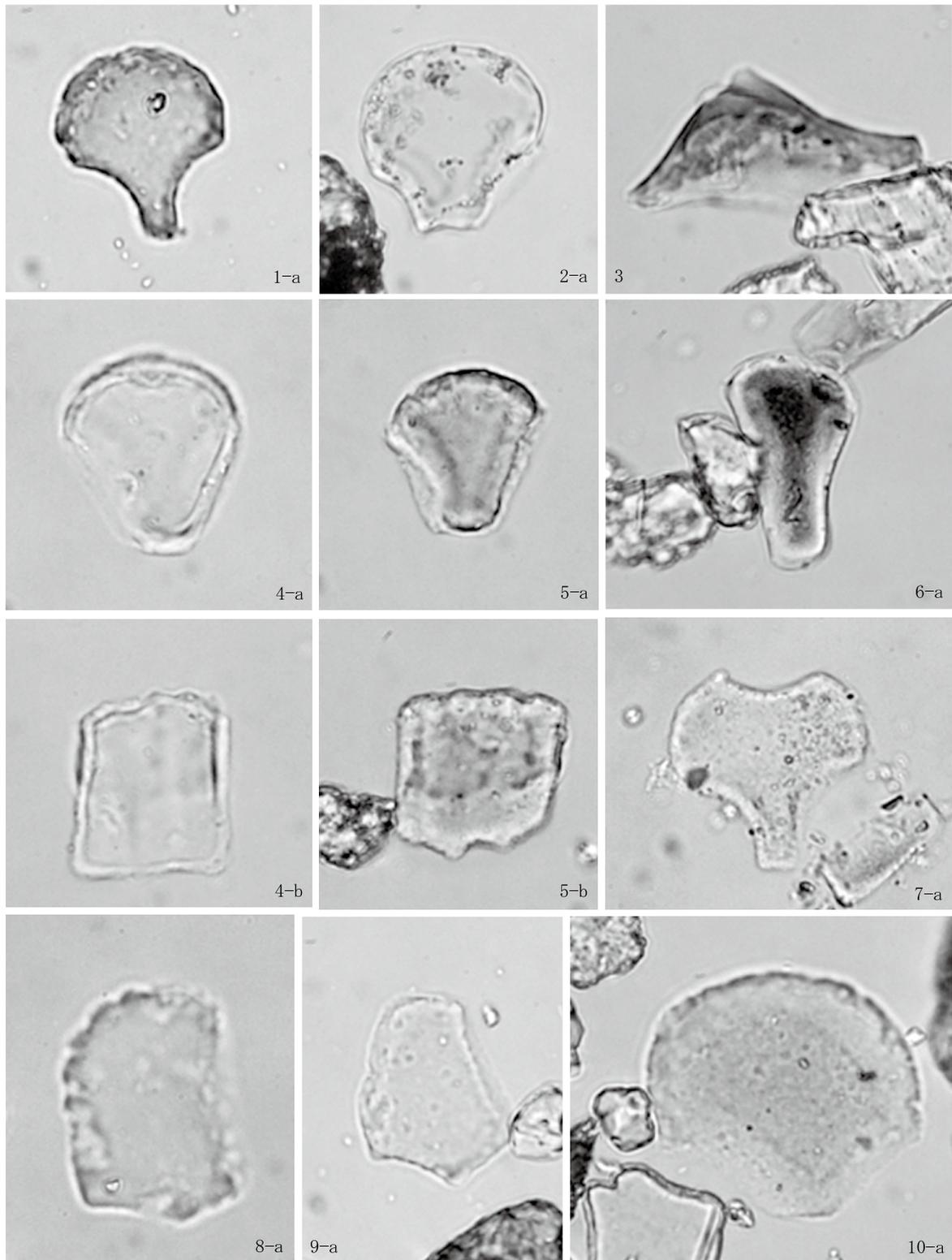
次に、堀内や堀周辺の植生について検討する。同一試料を用いて行われた珪藻分析によると、堀は水深が維持されていた水域環境と判断できる。花粉分析の結果においても、ガマ属やオモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属、ヒシ属、ゴキヅル属-アマチャヅル属、サンショウモ属、アカウキクサ属といった好湿性植物の花粉・胞子が検出されている。プラント・オパール分析においても抽水植物のヨシ属が検出されており、これらの植物が堀内や周辺に生育していたと考えられる。

また、御土居の築造直後の堆積物と考えられる9層（No.3）では、ヨモギ属やクリ属、コナラ属



1. マツ属複維管束亜属 (No. 1 PLC. 3557)
2. コナラ属コナラ亜属 (No. 1 PLC. 3558)
3. アカザ科-ヒユ科 (No. 1 PLC. 3559)
4. アブラナ科 (No. 1 PLC. 3560)
5. イネ科 (No. 1 PLC. 3561)
6. ソバ属 (No. 2 PLC. 3562)
7. ベニバナ属 (No. 2 PLC. 3563)
8. キュウリ属 (No. 3 PLC. 3564)

図5 産出した花粉化石



- | | | |
|-------------------------|-------------------------|-----------|
| 1. イネ機動細胞珪酸体 (No. 1) | 2. イネ機動細胞珪酸体 (No. 2) | |
| 3. イネ穎破片 (No. 2) | 4. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (No. 1) | |
| 5. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (No. 3) | 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (No. 2) | |
| 7. シバ属機動細胞珪酸体 (No. 1) | 8. ササ属型機動細胞珪酸体 (No. 3) | |
| 9. ササ属型機動細胞珪酸体 (No. 1) | 10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (No. 3) | a:断面 b:側面 |

図6 産出した植物珪酸体

コナラ亜属の花粉の産出率が高い。御土居の構築直後には、周辺に開けた明るい場所があり、そこにヨモギ属を主体とした草地やクリやコナラなどからなる二次林が存在した可能性がある。

その他にも、マツ属複維管束亜属やスギ属、コナラ属アカガシ亜属などの花粉の産出が、No.1～3の層準にかけて目立つ。御土居周辺の丘陵地などに、マツ林やスギ林、カシ類からなる照葉樹林が継続して分布していた可能性が考えられる。

さらに、今回の分析試料からは、栽培に関わる植物の産出も多く見られた。例えば、プラント・オパール分析では、いずれの試料においてもイネ機動細胞珪酸体の産出が見られ、9層から5層の上位層準に向かって産出量が増加している。また花粉分析では、ソバ属やアブラナ科、シソ科、ナス属、キュウリ属、ベニバナ属といった栽培植物を含む分類群が産出しており、9層から5層にかけての上位層準で産出率が増している分類群が多い。今回の分析地点の西方の洛外に広がる水田で裏作が行われるようになったか、水田とは別に畑地が増えたかは不明であるが、洛外における耕作地の拡大を反映している可能性がある。

なお、花粉分析の検鏡の際には、回虫卵や鞭虫卵といった寄生虫卵の産出も確認された。分析地点は、洛中からの下水も集積しやすい場所であった可能性を示唆する。

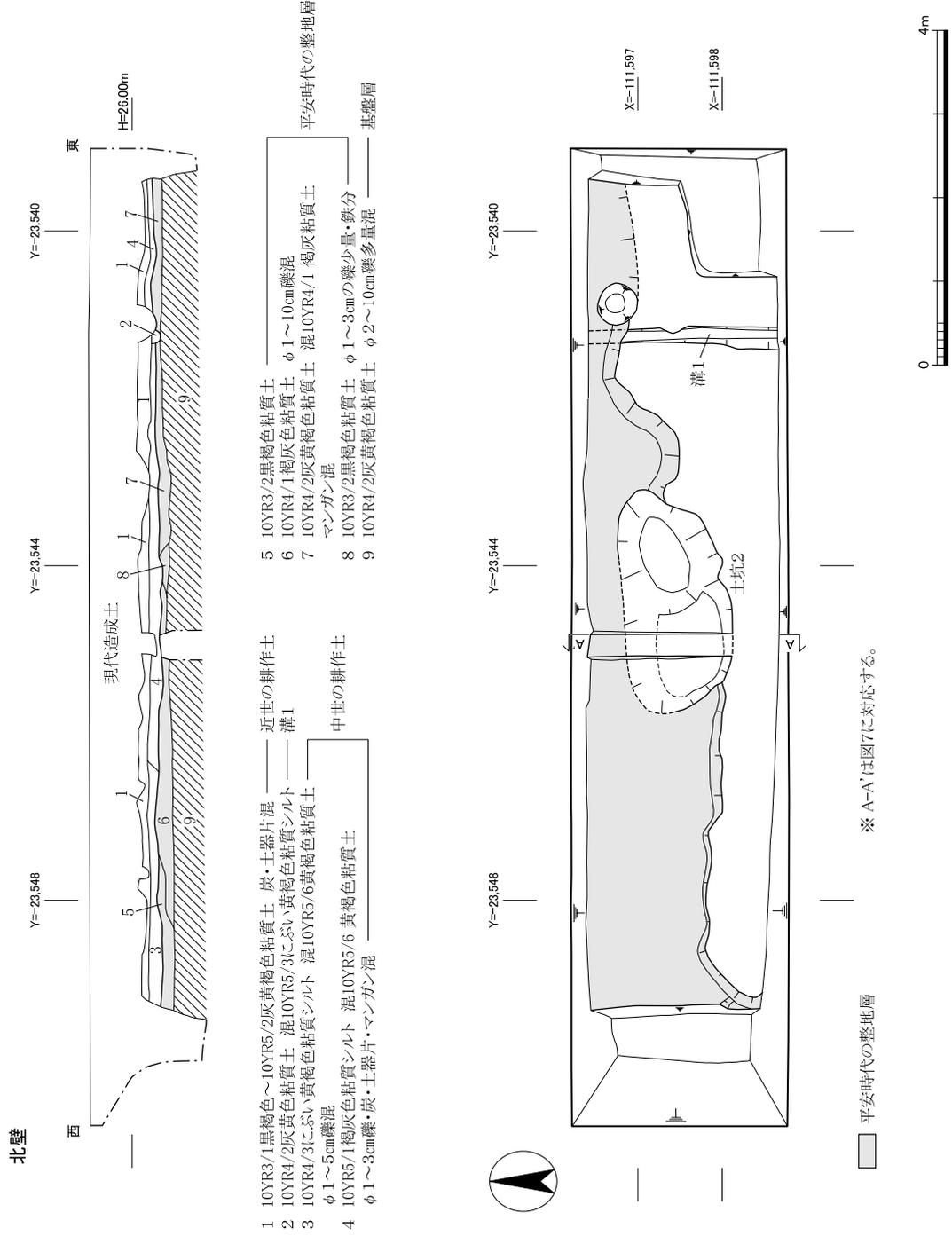
(森 将志)

引用文献

飯塚隼弘・近藤三雄(2011) 原始・古代から近世にかけての広義ののり面緑化に使用されてきた芝草等の地被植生の種類について. 芝草研究, 40, 47-51.

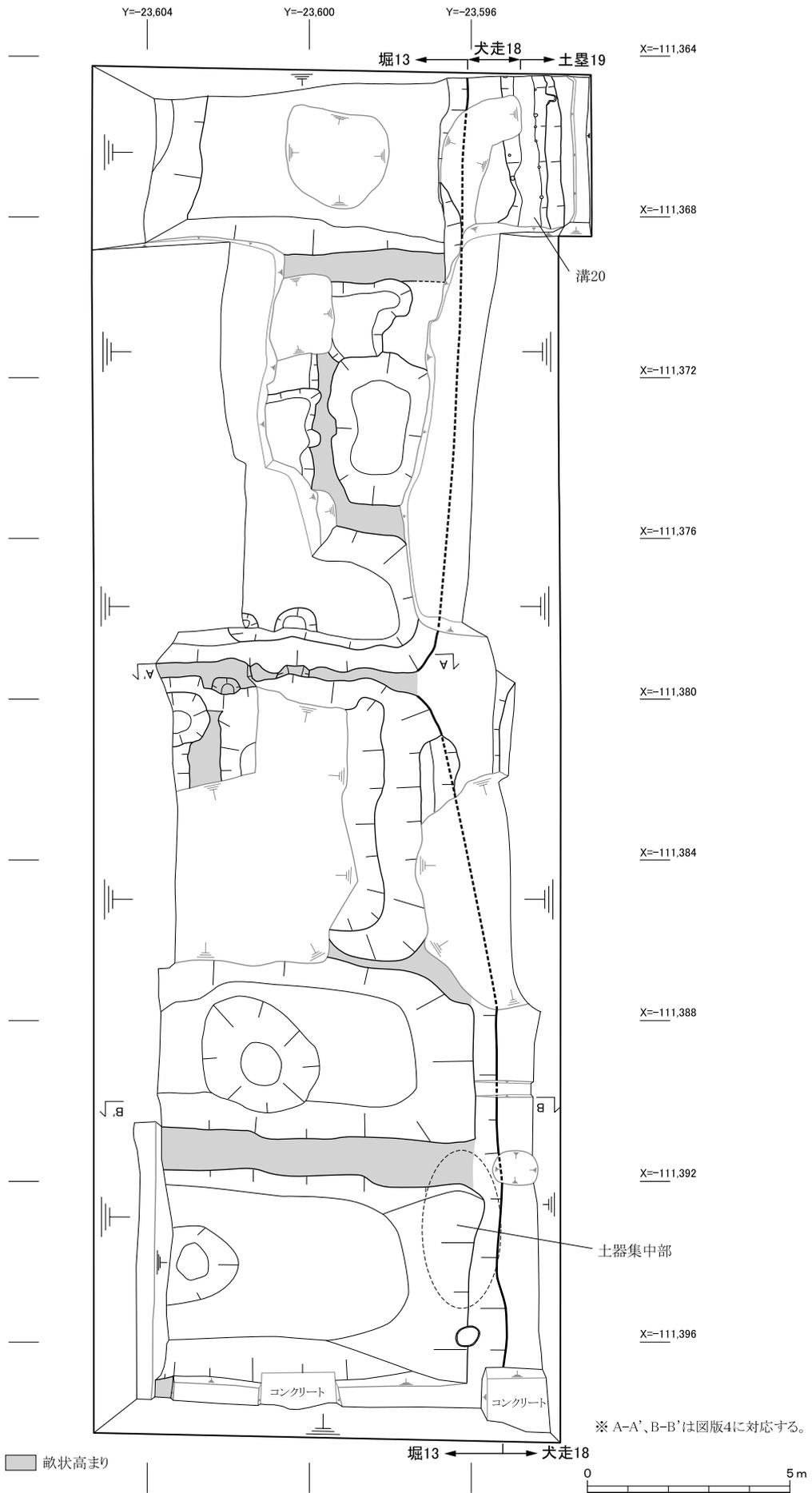
杉山真二・藤原宏志(1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－. 考古学と自然科学, 19, 69-84.

圖 版



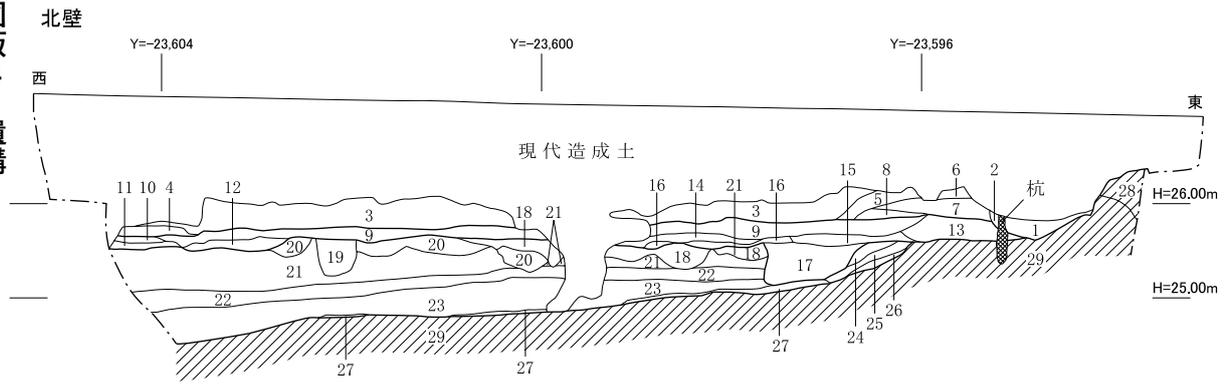
1区平面図・北壁断面図 (1:80)

図版2
遺構



2区平面図 (1:150)

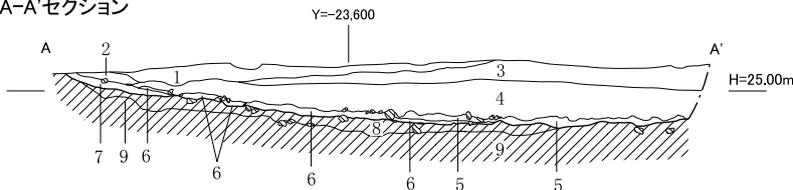
図版4
遺構



- | | | | |
|------------------------------------|--------|---------------------------------|-------|
| 1 2.5Y3/1黒褐色粘土と7.5YR3/4暗褐色中砂の互層 | 溝20 | 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 | 近世の溝 |
| 2 10YR3/1黒褐色粘土 | 近代の耕作土 | 18 10YR3/3暗褐色粘土 φ3~5cm礫多量、砂混 | 堀13上層 |
| 3 10YR3/1黒褐色粘土 砂混 | | 19 2.5Y3/2黒褐色粘土 φ3cm礫、砂混 | |
| 4 10YR3/1黒褐色粘土 φ3~5cm礫、砂混 | | 20 2.5Y3/1黒褐色粘土 φ0.5cm礫少量、骨片多量混 | |
| 5 10YR3/1黒褐色粘土 砂混 | | 21 10YR3/1黒褐色粘土 砂少量混 | |
| 6 7.5YR3/2黒褐色粘土 φ0.5~1cm礫、砂混 | | 22 2.5Y3/1黒褐色粘土 砂少量混 | |
| 7 10YR3/2黒褐色砂礫 | | 23 5Y3/1オリーブ黒色粘土 | |
| 8 10YR3/2黒褐色砂質粘土 | 堀13中層 | 24 10YR3/2黒褐色粘土 砂混 | 堀13下層 |
| 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫 | | 25 10YR3/4暗褐色細砂 | |
| 10 2.5Y3/2黒褐色粘土 砂混 | | 26 10YR3/3暗褐色粘土 砂混 | |
| 11 10YR3/1黒褐色粘土 φ0.2~0.3cm礫少量、砂混 | | 27 10YR3/3暗褐色粘土 | |
| 12 2.5Y3/1黒褐色砂質粘土 φ1cm礫多量、砂混 | 近代の耕作土 | 28 10YR5/6黄褐色シルト | 基盤層 |
| 13 10YR4/4褐色粘土 | | 29 7.5YR4/6褐色砂礫 | |
| 14 10YR4/3にぶい黄褐色シルト | | | |
| 15 7.5YR3/1黒褐色粘土 φ1cm礫多量、3~5cm礫少量混 | | | |
| 16 10YR3/1黒褐色粘土 砂混 | | | |



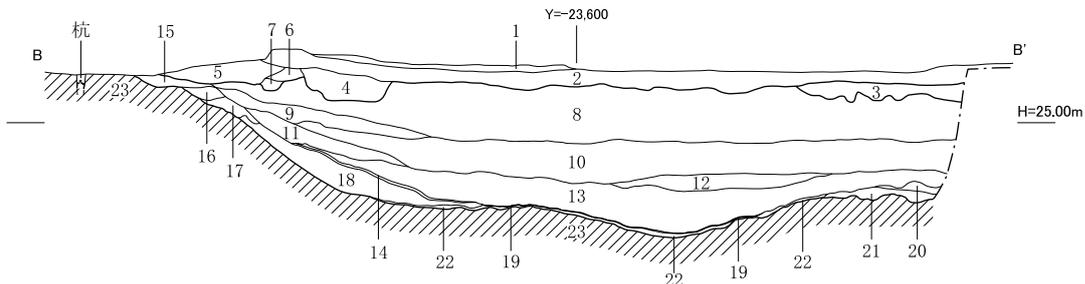
A-A'セクション



※ A-A'、B-B'は図版2に対応する。

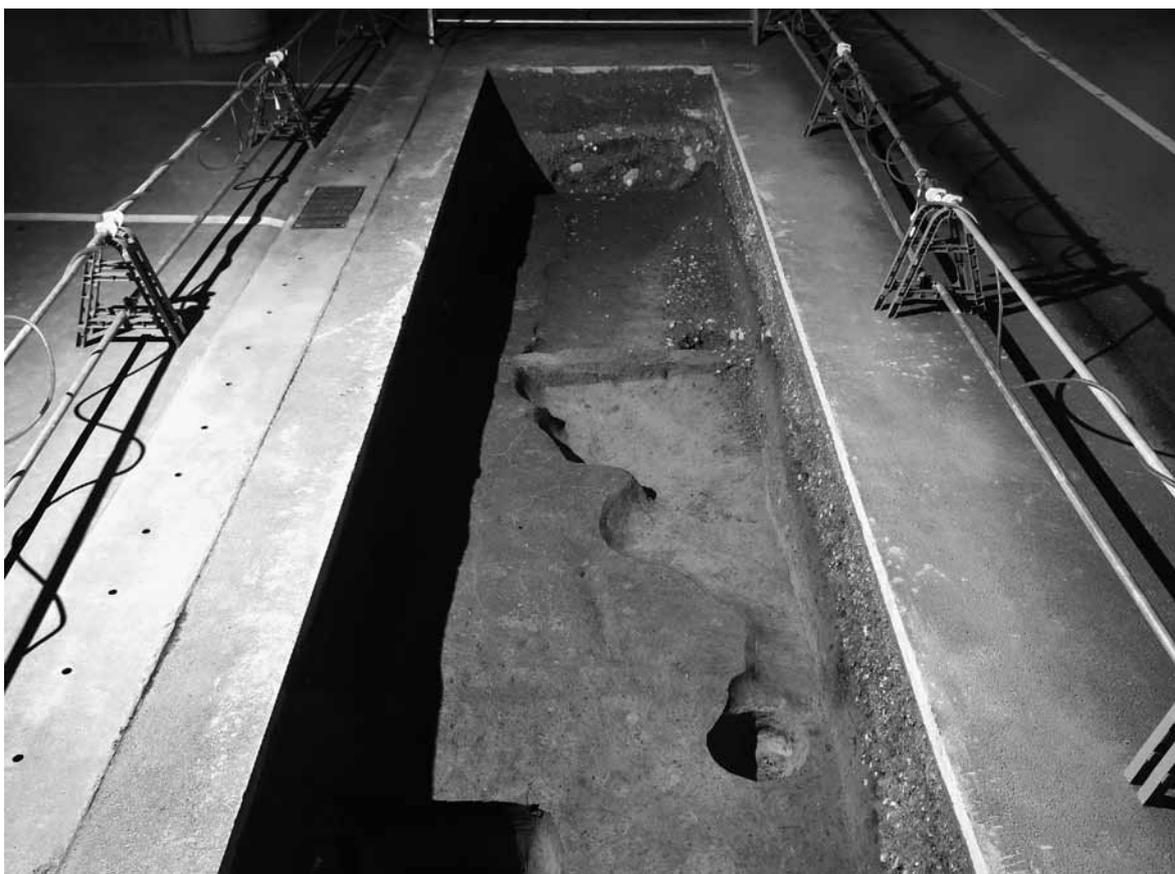
- | | | | |
|-----------------------------|-------|------------------------------|-------|
| 1 5Y2/2オリーブ黒色粘土 砂混 | 堀13上層 | 5 5Y3/1オリーブ黒色粘土 φ1・2cm礫多量、砂混 | 堀13中層 |
| 2 10YR4/1褐灰色粘土 φ1~3cm礫多量、砂混 | | 6 10YR4/2灰黄褐色粘土 φ2~3cm礫混 | |
| 3 10YR3/1黒褐色粘土 砂少量混 | | 7 10YR4/3にぶい黄褐色粘土質細砂 | |
| 4 2.5Y3/1黒褐色粘土 砂少量混 | | 8 10YR4/2灰黄褐色粘土 φ2~10cm礫多量混 | |
| | | 9 10YR4/4褐色砂礫 | 基盤層 |

B-B'セクション



- | | | | |
|----------------------------|--------|-----------------------------|-------|
| 1 5Y2/2オリーブ黒色砂質粘土 | 近代の耕作土 | 12 2.5Y3/1黒褐色粘土 砂混 | 堀13中層 |
| 2 10YR3/1黒褐色粘土 φ1~5cm礫、砂混 | | 13 5Y3/1オリーブ黒色粘土 | |
| 3 5Y4/2灰オリーブ色粘土 | | 14 10YR4/1褐灰色粘土 | |
| 4 2.5Y3/2黒褐色砂礫 粘土混 | | 15 10YR3/2黒褐色粘土 砂混 | |
| 5 10YR4/4褐色砂礫 粘土混 | | 16 10YR4/3にぶい黄褐色中砂 粘土混 | |
| 6 2.5Y3/1黒褐色中砂 粘土混 | | 17 10YR3/1黒褐色混中砂 粘土混 | |
| 7 2.5Y3/2黒褐色中砂 粘土混 | 近代の耕作土 | 18 10YR4/6褐色砂礫 粘土混 | 堀13下層 |
| 8 10YR3/1黒褐色粘土 砂少量混 | | 19 5Y3/1オリーブ黒色細砂 | |
| 9 2.5Y3/2黒褐色粘土 φ1cm礫、砂混 | 堀13上層 | 20 5YR4/1灰色シルト 粘土ブロック混 | 基盤層 |
| 10 2.5Y3/1黒褐色粘土 砂少量混 | | 21 10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粘土ブロック混 | |
| 11 5Y2/2オリーブ黒色中砂 粘土・φ3cm礫混 | | 22 5Y4/1灰色粘土 | |
| | | 23 10YR4/4褐色砂礫 | |

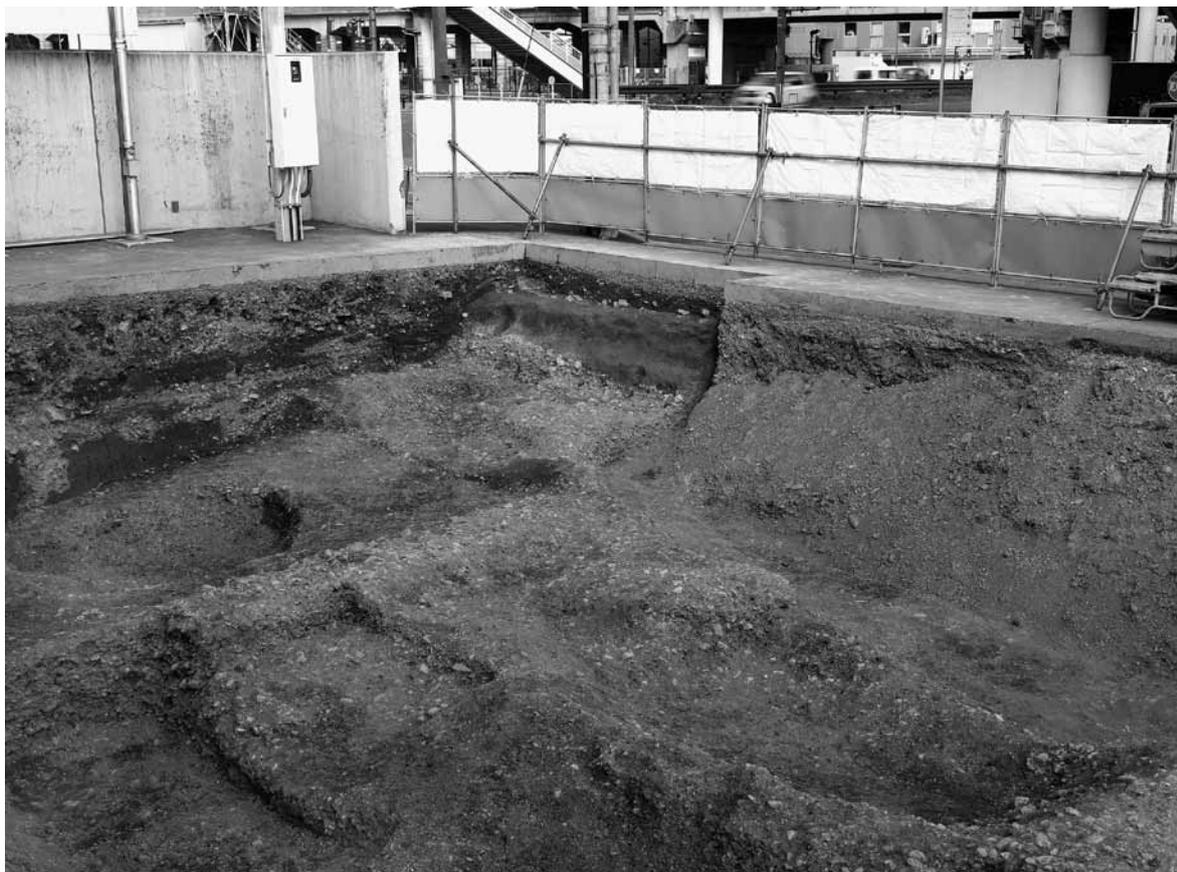
2区北壁・セクション断面図 (1:80)



1 1区全景（東から）



2 2区北半全景（北西から）



1 2区北半 犬走18・土墨19検出状況（南西から）



2 2区南半全景1（北から）



1 2区南半全景2 (南東から)



2 2区南半完掘状況 (北西から)



3 2区南半 畝状高まり断面 (北東から)



堀13出土土器・木製品

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょういちぼうさんちょう・ななじょういちぼういっちょうあと、おどいあと							
書名	平安京右京六条一坊三町・七条一坊一町跡、御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2021-15							
編著者名	松吉祐希							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2022年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区	26100	1	34度	135度	2022年1月	422.25㎡	施設整備
おどいあと 御土居跡	ちゅうどうじみなみまち 中堂寺南町130-1 の一部 すじやくぶんきちょう 朱雀分木町85・86、 ちゅうどうじみなみまち 中堂寺南町1-1・ 6-14の一部		149	59分 45秒	44分 29秒	2022年1月 18日～2022 年3月31日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
平安京跡	都城跡	飛鳥時代 ～奈良時代			瓦		御土居の土塁基底部、犬走り、堀を検出した。堀には東西・南北方向に畝状高まりがみられた。	
御土居跡	土塁跡	平安時代	土坑		土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦類			
		安土桃山時代 ～江戸時代	堀、犬走、土塁		土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、木製品、骨、貝、種実			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-15

平安京右京六条一坊三町・
七条一坊一町跡、御土居跡

発行日 2022年12月28日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961